

地域カルテ・マップの強化に向けた調査・研究事業
報告書

平成26年3月

日本データサービス株式会社

目 次

第1章	地域カルテ・マップの強化に向けた調査・研究事業の目的・概要	1
第2章	人口推移（将来推計）等の分析	10
第3章	地域マップによる地域課題の分析	50
第4章	世帯・地域特性等の分析	67
第5章	生活利便施設や地域のまちづくり活動等の状況	79
第6章	まちづくりセンター区域別の都市機能とコミュニティの分析	91
第7章	区及び地域の状況整理	98
第8章	考察	120

第1章 地域カルテ・マップの強化に向けた調査・研究事業の目的・概要

1 目的等

札幌市が平成 23（2011）年 11 月に公開した「地域カルテ・マップ」は、町内会¹や自治会、まちづくり協議会²などの地域のまちづくり活動を支える団体がより活発になるよう、地域に関する統計データ等を整理、分析し、地域課題を議論するための参考資料として作成した。また、平成 25（2013）年 7 月には、国勢調査をはじめとする各統計調査等の最新の数値を反映させるために「地域カルテ・マップ」の改訂を行ったところである。これまでの約 3 年間に、延べ 93 の連合町内会や単位町内会が、地域カルテ・マップを活用したワークショップや勉強会の開催支援、あるいは地域住民の意見を取り入れたオリジナルマップの作成等に取り組むなど、地域カルテ・マップの存在は、地域内のまちづくりに関する議論と活動の活性化に好影響をもたらしている。

その一方で、札幌市は、これまで右肩上がりであった人口が平成 27（2015）年から平成 31（2019）年頃に増加傾向から減少傾向に転じる見込みであるなど、少子高齢化の急速な進行が、大きな地域構造の変化をもたらし、その変化は地域によって大きく異なると予測される。こうした札幌市が経験したことがない地域構造の変化は、市民の住環境にも影響を及ぼし、既存のインフラや公共施設の役割の変化とともに、地域のまちづくり活動の内容にも変化が生じると考えられる。最近の新聞等の報道では、高齢者³への見守り拡充や空き住居の増加に伴う対応、高齢者に対する医療・買物支援、少子化による子ども関連施設の複合化など、それぞれの地域で多様な地域課題の顕在化が報じられているところである。

社会情勢に対応するべく、札幌市は、昨年「札幌市まちづくり戦略ビジョン⁴」（以下「戦略ビジョン」という）を策定し、平成 34（2022）年度までを見据えた新たなまちづくりの指針とした。特に、戦略編では、多様な地域の課題に対して、住民が主体的に取り組み、地域のつながりや支え合いといった共助の意識によりコミュニティの暮らしを豊かなものにすることが重要であるとして、戦略を持って取り組むべき 3 つ

¹ 【町内会】安全・安心で快適なまちを実現するために、地域住民の親睦や高齢者の見守り、子育てに関する活動をはじめとして、除排雪、ごみステーションの管理、清掃活動、お祭りなど、地域で生活するために欠かすことのできない活動を行っている住民等で組織される任意団体・地縁団体のこと。

² 【まちづくり協議会】地域で活動している様々な団体などがゆるやかに結びつき、それぞれが得意分野を生かしながら、地域の課題解決や目標を達成するためのネットワーク組織。

³ 【高齢者】65 歳以上の人。

⁴ 【札幌市まちづくり戦略ビジョン】札幌市を取り巻く社会経済情勢の大きな変化に対応するための新たなまちづくりの指針であり、札幌市のまちづくりの計画体系では最上位に位置付けられる総合計画。計画期間は平成 25（2013）年度から平成 34（2022）年度までの 10 年間であり、目指すべきまちの姿を描いた<ビジョン編>と、主に行政が優先的・集中的に実施することを記載した<戦略編>で構成されている。

のテーマの1つに「暮らし・コミュニティ」を挙げている。

こうした社会情勢や札幌市におけるまちづくりの指針を踏まえると、現行の地域カルテ・マップのように最新の統計データなどから現状を把握するのみならず、今後10年、あるいは20年先の地域を見据えた住民同士の議論を深めていくための新たな視点として、将来推計人口の数値を追加する必要があると判断した。

そこで、札幌市は、市民がそれぞれの居住地域において、「将来、どのような課題が生じるのか」、「今後、どのようなまちを描いていくのか」などの未来像を共有しながら、早期に少子高齢化社会の到来を踏まえた地域のまちづくりを進めることを目的として、戦略ビジョンの推進に合わせた次期「地域カルテ・マップ」を作成することとし、その検討のための研究報告書として本書を作成した。

2 作成に当たっての留意点

今回の作成に当たっては、これから先に生じる変化が地域によって大きく異なること、また、地域のまちづくりを行う主体のコミュニティエリアに合わせた将来展望を把握する必要があることから、これまで行政機関や研究機関が公表してきた行政区単位の将来推計人口ではなく、地域カルテ・マップ同様、より身近な生活領域で、地域のまちづくり活動のベースとなる「まちづくりセンター⁵区域」の将来推計人口を掲載することとした。

また、可能な限り小さな地域単位ごとの現状を把握し、戦略ビジョンに掲げる都市像を具現化するために、医療施設や公共交通、商業施設など市内の情報を集約し、市民、地域、行政がともに充実した情報の共有を図れるように作業を進めてきた。

このことから、地方自治体や行政区単位で数値を公表している国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）をはじめとした研究機関等の数値ではなく、札幌市独自で過去の統計データなどを踏まえて将来推計人口を算出している。通常、まちづくりセンター区域などの行政区よりも小さな地域単位での将来推計人口は、大型マンションや新規宅地等の開発等に大きな影響を受けるため、数値に大幅な振れ幅が生じる可能性があることに留意すべきだが、地域単位の人口規模が1～2万人程度と大きく、道内の他の地方自治体と比較しても大きいこと、これからの地域のまちづくりを市民が議論するために必要不可欠な数値であることなどを勘案し、将来推計人口を採用して分析を行うこととした。

⁵ 【まちづくりセンター】 住民組織の振興、地域の要望などの収集、市政の周知などに加え、様々なまちづくり活動を支援する地域の拠点として市内に87か所設置（平成26（2014）年3月現在）。

加えて、統計や地域コミュニティ⁶に関する専門的な知見や客観的な評価を得るために大学教員等の学識経験者[※]に協力をいただきながら、検討委員会を開催し、将来推計人口の分析手法を検討するとともに、地域課題を把握するために必要な項目の整理やグラフ等の表示方法など、意見をいただきながら作成した。

※ 検討委員会メンバー（敬称略、50音順）

飯田 俊郎（札幌国際大学教授）

岡本 浩一（北海学園大学教授）

鈴木 克典（北星学園大学教授）

西脇 裕之（札幌大谷大学准教授）

事務局（市民自治推進室市民自治推進課、日本データサービス（株））

同委員会においては、こうした身近な地域の将来像を住民が気づき、また共有し、さまざまな課題等を議論していくことは、今後の市民自治によるまちづくりの推進を加速させるきっかけとして有効との意見が出されているところである。

これと並行し、札幌市内部でも各地域の将来像を把握した上で、施策等を展開することが重要との意見も出されている。

このことから、数値とマップを併用しながら使いやすさや見やすさ（ユーザビリティ）を向上させるとともに、施策などの検討資料として活用できるよう出典や個別の詳細なデータの収集にも配慮している。

3 編集方針

本書では札幌市の各地域における将来を見据えた議論・活動の活性化を図るべく、必要となる既存の統計データ等を収集・調査し、特に「人口減少」、「高齢化」及び「少子化」に重点を置いて分析した。

同時に、今後、地域及び行政がこうした情報を共有し、地域マネジメント⁷のツールとなるよう、カルテやマップがわかりやすく表示されているか、地域で活用されやすいかなど、前述の検討委員会等でさまざまな意見をいただきながら、次期「地域カルテ・マップ」の検討のための研究報告書として編集した。

⁶ 【地域コミュニティ】 コミュニティは、地縁、血縁、文化的背景、価値観などに基づく共同体であり、そのうち、地縁的な要素の大きいものを地域コミュニティとする。

⁷ 【地域マネジメント】 地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるため、経営的な発想を持って市民・企業など地域の様々な活動主体の連携の下で行う主体的な取組。

4 本書の構成

本書は、次のとおり全8章で構成している。

章	内容
1	地域カルテ・マップの強化に向けた調査・研究事業の目的・概要
2	人口推移（将来推計）等の分析
3	地域マップによる地域課題の分析
4	世帯・地域特性等の分析
5	生活利便施設や地域のまちづくり活動等の状況
6	まちづくりセンター区域別の都市機能とコミュニティの分析
7	区及び地域の状況整理
8	考察

第2章では、まず区や地域の将来像をイメージし、共有するため、札幌市が独自に算出した将来推計人口を活用し、特に「人口減少」、「高齢化」及び「少子化」に重点を置いて、各区及び各まちづくりセンター区域別の特徴を表やグラフを中心に整理、分析している。

第3章では、これを全市的な視点から確認でき、直感的な理解ができるように、第2章の結果を地域マップにより表示している。

第2章と第3章では主に現在から将来に向けての人の動き（人口動態⁸）に着目していたが、第4章以降では別の視点から区や地域の状況を整理・分析している。

第4章では、世帯やコミュニティなどの観点から地域の特徴を整理・分析しており、第5章では施設（公共及び民間）や公共交通機関などの整備状況（ハード）及び快適な暮らしを支えるための地域のまちづくり活動（ソフト）の両面から区や地域の状況をまとめている。

第5章までは区及びまちづくりセンター区域での整理・分析を中心としてきたが、第6章では視点を変えて、公共交通機関を中心とした利便施設の状況や住環境などの差異に着目し、区の範囲を超えて、類似する特徴をもつ地域の分類化による分析を中心に実施している。

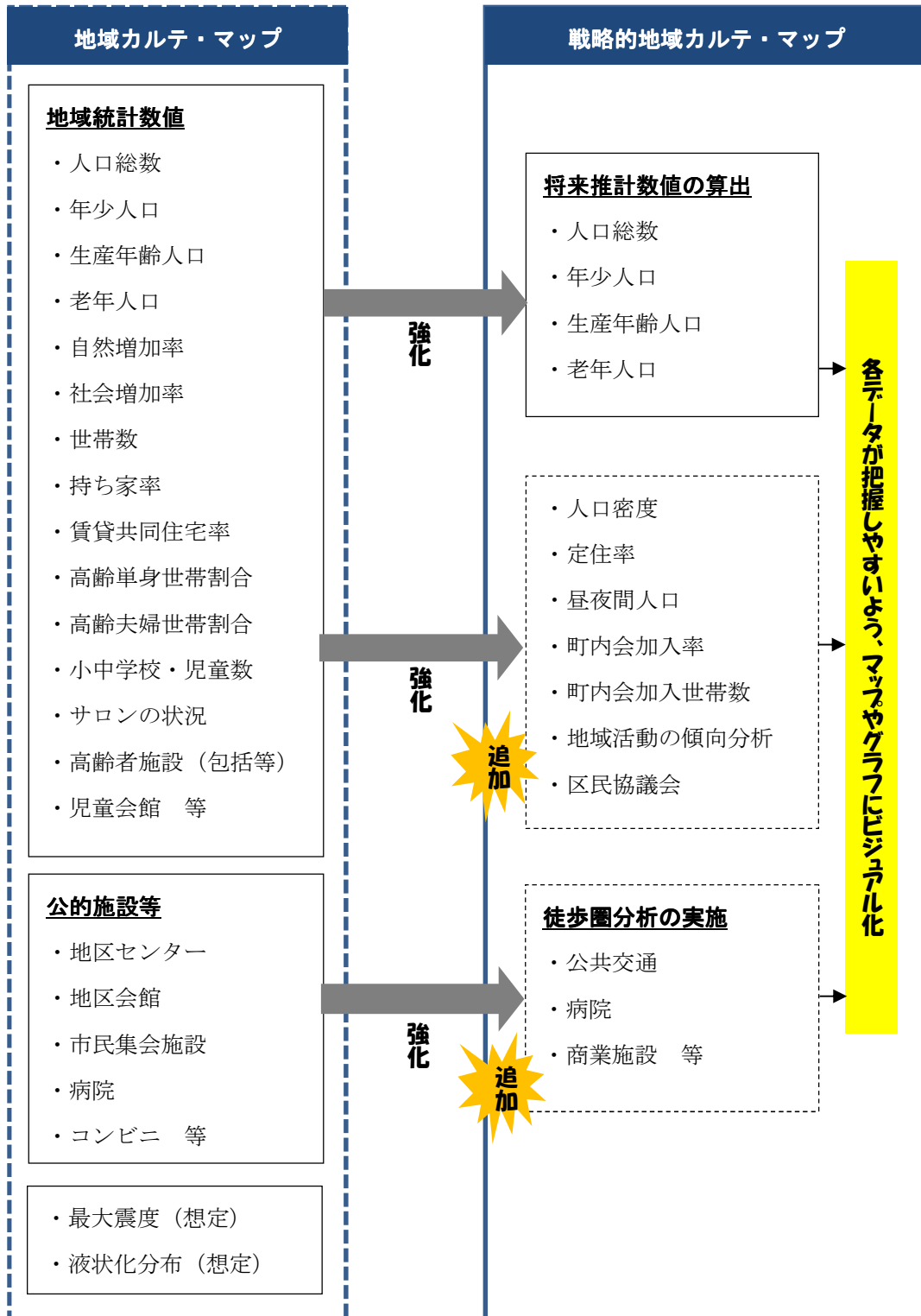
第7章では、各章ごとに分析してきた結果を、各区や各地域別に一覧できるように表にまとめ、第8章では本書で整理・分析した結果を踏まえてどのような対応が可能か考察を掲載している。

⁸ 【人口動態】 出生・死亡、転入・転出などを合わせた人口の動き。

5 戦略的地域カルテ・マップにおける数値強化のポイント

掲載数値は、現行の地域カルテ・マップを基本とし、項目数の増加によるわかりにくさを解消するため、マップ等を活用しながら掲載を行った。

【図1 主な数値強化のイメージ】



6 戦略的地域カルテ・マップの引用データの解説

(1) 引用データ出典一覧

当冊子における数値及びマップの基本データは下記のとおり。

名称	引用先
人口総数	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 推計数値は、国勢調査をベースに札幌市市長政策室政策企画部が作成。
年齢別（5 歳階級）人口	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 推計数値は、国勢調査をベースに札幌市市長政策室政策企画部が作成。 なお、0 歳～14 歳人口を年少人口、15 歳～64 歳人口を生産年齢人口、65 歳以上人口を老年人口という。
高齢化率	65 歳以上人口を総人口で除して算出。
自然増加	住民基本台帳（平成 24（2012）年中）
社会増加	住民基本台帳（平成 24（2012）年中）
居住期間	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日）
昼間人口	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日）
常住人口	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日）
昼夜間人口比率	昼間人口を常住人口で除して算出。
世帯数	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日）
一世帯あたり人員	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 人口総数を世帯数で除して算出。
高齢単身世帯割合	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 65 歳以上の 1 人のみの一般世帯を世帯数で除して算出。
高齢夫婦世帯割合	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 夫 65 歳以上、妻 60 歳以上の夫婦のみの一般世帯を世帯数で除して算出。
住居の種類	国勢調査（平成 22（2010）年 10 月 1 日） 持ち家、公営等の借家、民営の借家、給与住宅、間借り

名称	引用先
町内会数 町内会加入率 町内会加入世帯数	札幌市市民まちづくり局市民自治推進室 http://www.city.sapporo.jp/shimin/shinko/chounaikai/genjo.html
民生委員数	札幌市保健福祉局総務部
事業所数	経済センサス（平成 21（2009）年 7 月 1 日）
商店街数	平成 21（2009）年度札幌市小売商業実態調査 （札幌市経済局産業振興部）
病院	北海道救急医療・広域災害情報システム http://www.qg.pref.hokkaido.jp/qg/qg01.asp
警察	札幌市ホームページ（市民まちづくり局地域振興部） http://www.city.sapporo.jp/shimin/chiiki-bohan/policebox/index.html 北海道警察ホームページ（各警察署から参照可能） http://www.police.pref.hokkaido.lg.jp/ps/ps-top.htm
消防	札幌市ホームページ （消防局総務部） http://www.city.sapporo.jp/shobo/shokai/about/renraku/renrakul.html
地域包括支援センター 介護予防センター	札幌市ホームページ （保健福祉局高齢保健福祉部） http://www.city.sapporo.jp/kaigo/k100citizen/k170houkatuyobou.html
応急給水拠点	札幌市ホームページ （水道局給水部） http://www.city.sapporo.jp/suido/c03/c03third/kinntyo.html
まちづくりセンター 福祉のまち推進センター 地区会館 地区センター 町内会館	札幌市市民まちづくり局地域振興部 <地域の市有施設> 「札幌市の区政」参照 <その他の主な施設> コミュニティ施設位置図参照

名称	引用先
公園	札幌市ホームページ (環境局みどりの推進部) http://www.city.sapporo.jp/ryokuka/shiryo/toukei/index.html
公営住宅数 (市営・道営)	札幌市住宅管理公社ホームページ http://www.s-j-k.or.jp/index.html 北海道ホームページ http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/jtk/jtop/kannri/nyukyotop.htm
公営住宅数(その他)	UR 都市機構ホームページ http://www.ur-net.go.jp/hokkai-tohoku/index.html 北海道住宅供給公社ホームページ http://www.lilac.co.jp/hokkaido-jkk/

(2) 人口に関する将来推計の算出

ア 推計の方法等

推計期間は、平成 27 (2015) 年から平成 47 (2035) 年まで 5 年ごとの 20 年間とし、区別及びまちづくりセンター区域別に将来人口を推計した。

(ア) 区別将来推計人口

コーホート要因法により推計した。ある年の男女・年齢 (5 歳階級) 別人口を基準として、生残率⁹や純移動率¹⁰の仮定値を当てはめて計算している。

また、新たに生まれる人口には、出生率の仮定値を当てはめて計算している。

(イ) まちづくりセンター区域別将来推計人口

区別とは異なり、コーホート変化率法により推計した。(ア)で算出した将来人口の推計結果から、男女・年齢 (5 歳階級) 別の変化率を算出し、当該比率を各区内のまちづくりセンターに適用して計算している。

また、0～4 歳人口の推計については、子ども女性比率¹¹を用いて計算している。

イ 推計に係る留意点

将来推計人口の算出に当たっては、札幌市の過去の統計データや社人研の推計した統計数値などを基に、仮定値を設定し算出しているが、将来、起こり得る大規模な宅地開発やマンション建設などにより、今後の人口推移が推計と大きく異なる可能性がある。こうした実際の人口推移と本推計の乖離は、人口規模の小さい区や地域ほど大きく表れやすいことに留意する必要がある。

また、まちづくりセンター区域別将来推計人口は、区の動きを基に推計していることから、地域ごとの特性が抑えられたものになっている可能性がある。

例えば、大学周辺で学生の居住が多く、20 歳前後の人口が突出して多い地域があった場合、基本的には学生は入学と同時に転入し、卒業と同時に他地域へ転出するため、その地域では将来に渡って、20 歳前後の人口が多い状態が続く。しかし、区の動きを基に推計していることから、その特殊な人口動態は抑えられ、極端な社会的要因による流出入が将来の人口推計に反映されないということが起こり得る。

このように、地域の特性が抑えられる可能性や、推計と乖離が出る可能性も考慮し、地域の将来を推察する必要がある。

⁹ 【生残率】 ある年齢 (x 歳) の人口が、5 年後の年齢 (x+5 歳) になるまで生き残る確率。死亡率の対義語。

¹⁰ 【純移動率】 ある地域の人口に対する他地域間との転入超過数の割合。転入超過数=転入者数-転出者数。

¹¹ 【子ども女性比率】 0～4 歳の人口と 15～49 歳の女性人口の比率。ここでは、区別に算出した将来推計人口の結果から比率を算出し、その比率を各まちづくりセンターに適用し、推計に使用している。

第2章 人口推移（将来推計）等の分析

この章では、区や地域の将来像を把握し、共有するために、人口の増減、高齢化や少子化の状況について、区及びまちづくりセンター区域別の将来推計人口をもとに掲載した。各区やまちづくりセンター区域は、その規模が異なるために単純な数値の比較ができないこと、高齢化や少子化は、老年人口や年少人口の数値とともに、地域に占める割合や将来推計値の変化率とともに俯瞰できるようになっている必要があることなどから、地図やグラフを用いて、できる限り直感的に理解できるよう編集上の工夫を行っている。

また、人口の増減の要因がどの年齢層の変動の影響を受けているのか相関性を分析するとともに、人口の増減によって地域の環境がどのように変化するか人口密度に着目して編集を行った。また、まちづくりセンター区域別の人口密度を示すことにより、今後、人口の集積と分散がどのように変化するかを把握することができる。

1 人口推移

(1) 人口推移と各区の構造

【図2 札幌市における各区の人口推移】
人

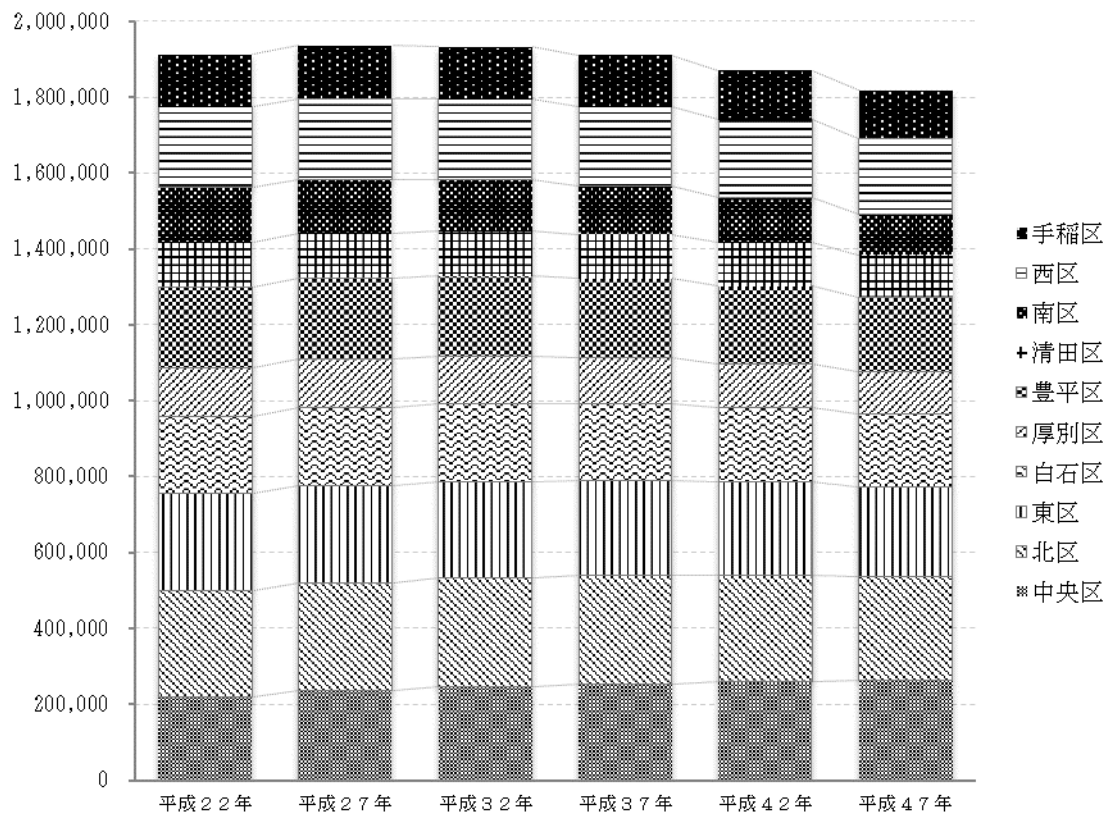


図 2 は、区別に算出した将来推計人口を積み上げ、平成 22（2010）年の国勢調査による人口が将来に向けてどのように推移するのか示したものである。

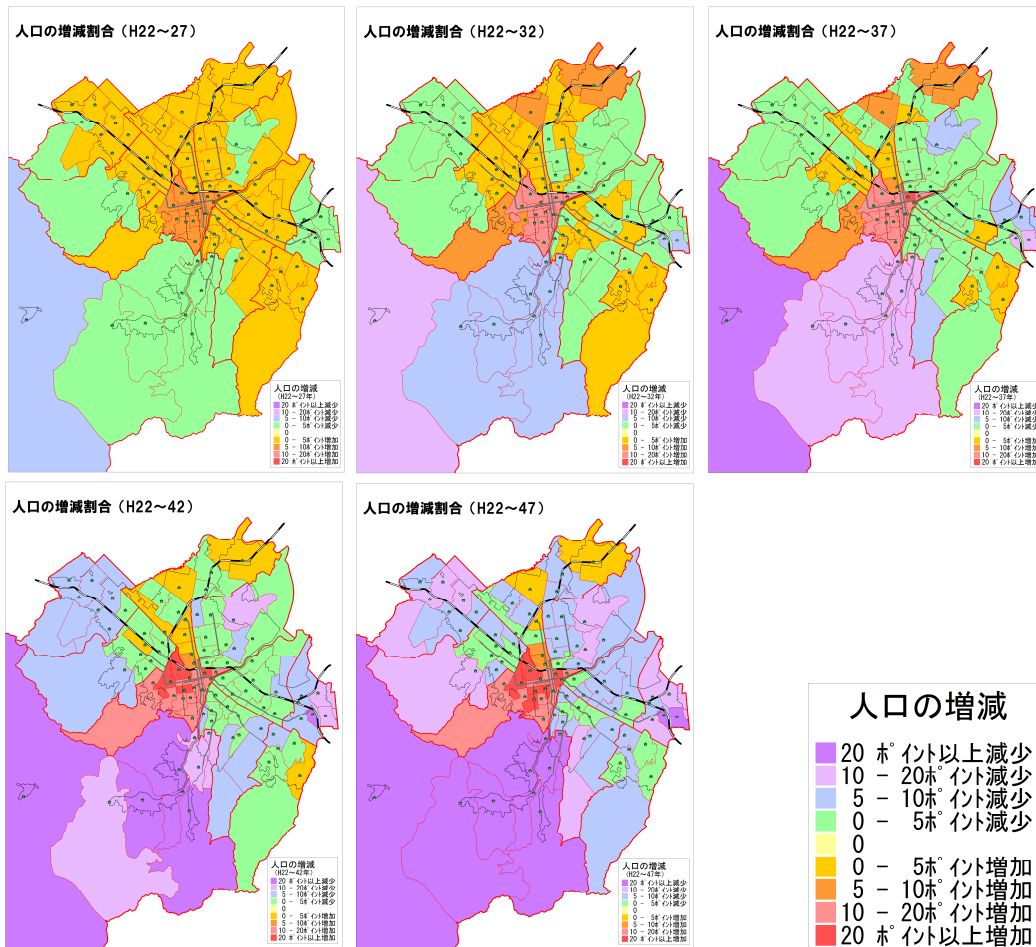
区別の特徴としては、中央区だけが増加傾向が続き、北区や東区、白石区の減少幅は年を追うごとに徐々に縮小するのに対して、厚別区や豊平区、清田区、南区、西区、手稲区は人口減少の幅が比較的拡大する。

こうした特徴は、図 3 から把握できるところであり、郊外住宅地¹²で人口の減少傾向が目立ち、逆に中央区を中心とした都心¹³の人口は増加傾向にある。また、北区や清田区の一部では、平成 32（2020）年頃までは増加する一方、その後減少に転じ、人口増減割合の変化が大きくなるなど、人口増減割合の推移も区によって状況が異なっている。

¹² 【郊外住宅地】 都心からほぼ 6km 以遠の区域のうち、高度利用住宅地（大量公共交通機関の沿線、都心周辺部、広域交流拠点・地域中心角とその周辺の区域）を除く区域。札幌市都市計画マスタープラン（平成 16（2004）年） p. 41

¹³ 【都心】 JR 札幌駅北口の一帯、大通東と豊平川が接する付近、中島公園、大通公園の西端付近を頂点として結ぶ区域。札幌市都市計画マスタープラン（平成 10（2004）年） p. 46

【図3 各区の人口増減割合の推移（平成22（2010）年度対比）】



また、札幌市全体の男女の人数差はより拡大し、平成47（2035）年には、約16万8千人まで差が拡大すると予想されている。

女性は、子育てサークルやボランティアサークルといった活動などに積極的な方も多く、今後は、女性の社会進出がより活発になるよう一層の支援が求められるほか、地域のまちづくり活動においては、女性の高齢者の力がさらに重要性を増し、町内会活動への参加促進が期待される。

【参考：札幌市における男女別人口総数の推移（単位：千人）】

	H22	H27	H32	H37	H42	H47
男性(A)	897	901	893	877	854	825
女性(B)	1,017	1,036	1,040	1,034	1,017	993
(B)-(A)	+120	+135	+147	+157	+163	+168

(2) 各区の人口増減と高齢化の動向

札幌市では、多くの地域で人口の減少と高齢化が同時に進行する見込みである。そこで、各区の人口の増減と高齢化の進行をあわせて一覧できるように図4に図示した。

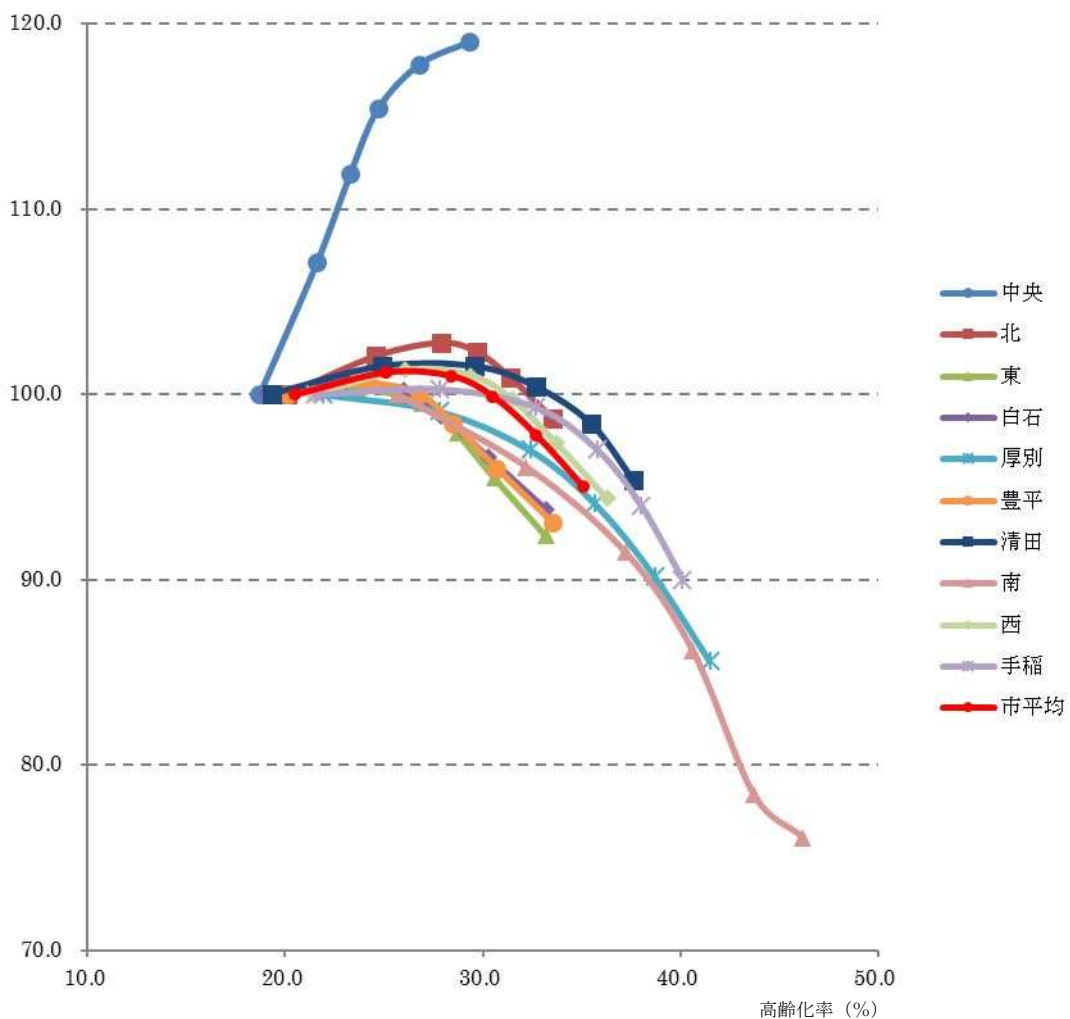
図4では、縦軸が平成22(2010)年の人口を100とした場合の人口増減比率を示し、横軸が平成22(2010)年以降、5年ごとの高齢化率(平成27(2015)年以降は推計数値)を示している。

人口については、中央区を除いた9区で減少が進み、高齢化については、全区で進行(全区で図4のグラフが右に進む)すると予想される。

また、その推移は各区によって大きく異なり、南区や厚別区、手稲区では人口減少や高齢化が他の区よりも顕著であることが図4からわかる。

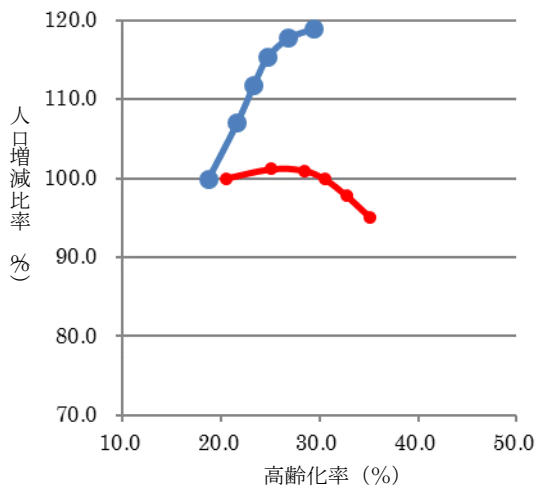
【図4 区別人口増減比率(平成22(2010)年=100)及び高齢化率(単位:%)】

人口増減比率(平成22(2010)年=100)

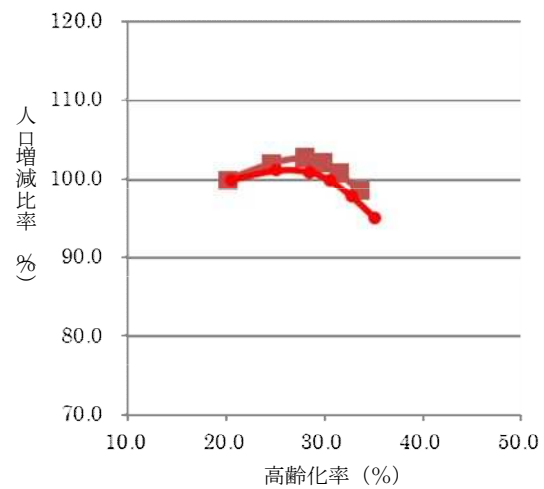


【図5 各区の人口増減と高齢化の特徴（赤色のグラフは市平均を表す）】

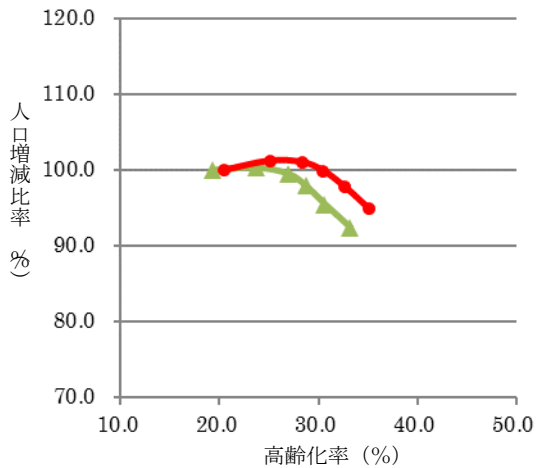
【中央区】人口増加が継続、高齢化の進展も緩やか



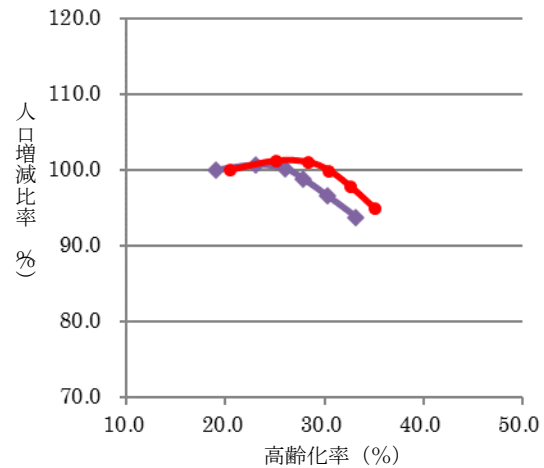
【北区】人口減、高齢化とも市平均に比して緩やか



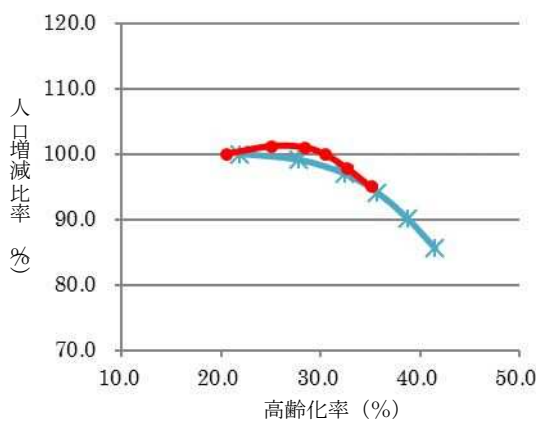
【東区】人口減は市平均より進むが、高齢化は緩やか



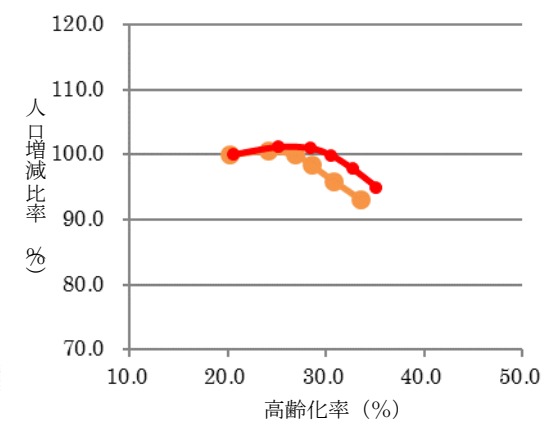
【白石区】人口減は市平均より進むが、高齢化は緩やか



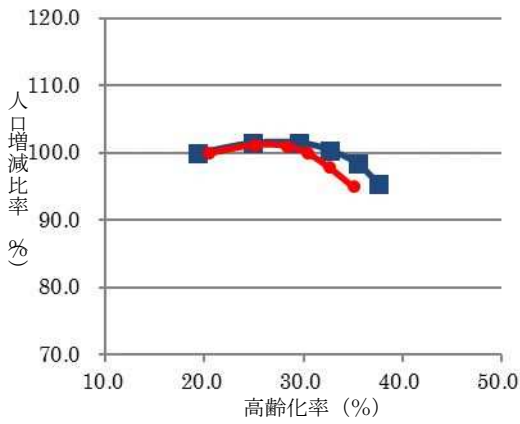
【厚別区】市平均に比して人口減、高齢化ともに進行



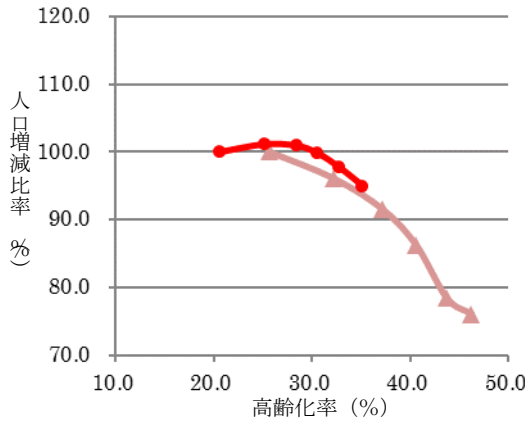
【豊平区】人口減は市平均より進むが、高齢化は緩やか



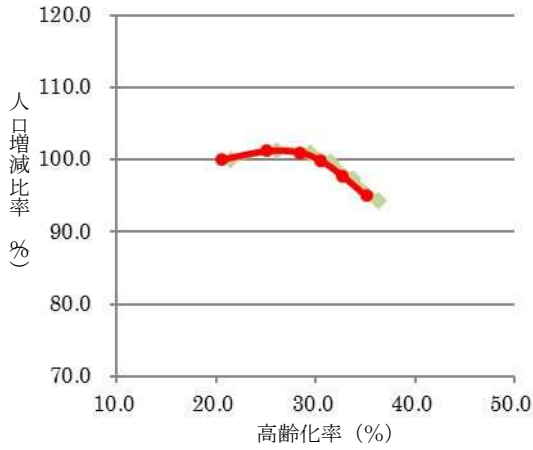
【清田区】人口は市平均同様だが、市平均に比して高齢化が進む



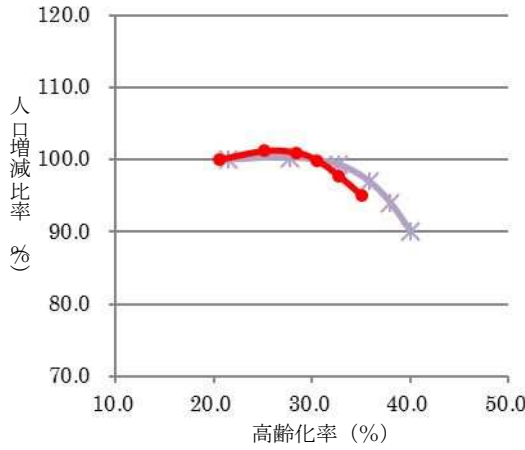
【南区】人口減、高齢化とも市平均に比して著しく進む



【西区】人口、高齢化ともほぼ市平均同様の動き



【手稲区】年次経過に伴い人口減、高齢化が進行

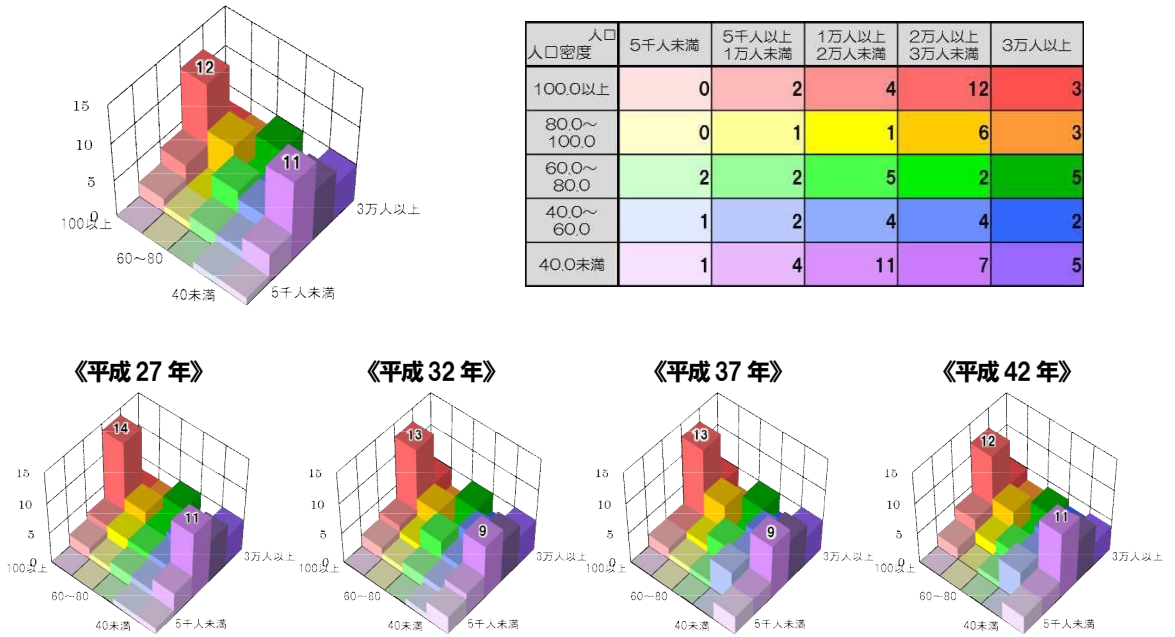


(3) まちづくりセンター区域別人口と人口密度

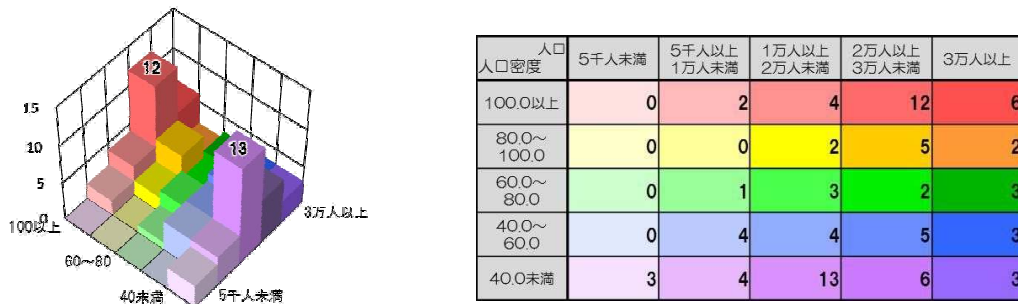
図6はまちづくりセンター区域の人口とその面積（都市計画区域の面積。単位はha）当たりの人口密度を対比して図示したものである。色が濃くなるに従って人口が多く、且つ、赤色（暖色）に近くなるに従って人口密度が高いことを示す。

【図6 まちづくりセンター区域別人口数と人口密度の動向】

ア 平成22（2010）年以降の推移（数字は箇所数）



イ 平成47（2035）年の想定（数字は箇所数）



☑ポイント

- ・2万人以上3万人未満で人口密度が100.0を超える区域と、1万人以上2万人未満で人口密度が40.0未満の区域が多い傾向は、平成22（2010）年及び平成47（2035）年で共通している。
- ・人口密度60.0～80.0の区域（緑色）が平成47（2035）年には減少し、人口密度100.0以上と40.0未満の 카테고リーに二極化している。

ウ まちづくりセンター区域別の人口と人口密度の状況

まちづくりセンター区域別に算出した将来推計人口とそれを各まちづくりセンターの都市計画区域面積で除した人口密度を示している。色が濃くなるに従って人口が多く、且つ、赤色（暖色）に近くなるに従って人口密度が高いことを示しており、下記の表で地域ごとの人口変動推移が把握できる。

【表1 まちづくりセンター区域別人口の推計値と人口密度の動向】

※表1では、図6で定義した人口と人口密度に応じた色で網掛けしている。

・中央区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	大通公園	40.4	8,010	43.1	8,560	44.7	8,860	45.7	9,060	46.4	9,200	46.8	9,280
2	東北	82.2	5,777	90.4	6,350	95.8	6,730	99.9	7,020	103.5	7,270	105.9	7,440
3	苗穂	49.2	4,411	52.6	4,710	55.0	4,930	56.8	5,090	58.0	5,200	58.6	5,250
4	東	172.2	8,496	185.3	9,140	194.0	9,570	200.7	9,900	205.9	10,160	208.8	10,300
5	豊水	69.7	7,715	74.2	8,210	76.9	8,510	78.6	8,700	79.5	8,800	79.4	8,790
6	西創成	141.6	8,046	152.6	8,670	160.0	9,090	165.3	9,390	168.8	9,590	170.7	9,700
7	曙	157.4	13,385	168.7	14,340	175.8	14,950	180.9	15,380	184.2	15,660	185.5	15,770
8	山鼻	92.1	33,970	98.4	36,300	102.6	37,850	105.5	38,940	107.3	39,570	108.0	39,840
9	幌西	113.4	21,851	121.9	23,480	128.1	24,670	132.6	25,540	135.3	26,070	136.9	26,380
10	西	181.6	16,918	197.7	18,420	207.9	19,370	215.8	20,110	222.3	20,710	226.7	21,120
11	南円山	78.2	15,452	82.5	16,310	85.5	16,890	87.6	17,310	88.9	17,570	89.7	17,720
12	円山	91.6	27,053	98.9	29,190	104.0	30,700	107.8	31,820	110.3	32,570	111.9	33,020
13	桑園	82.8	25,220	89.4	27,220	93.8	28,570	97.4	29,640	99.9	30,400	101.2	30,820
14	宮の森	13.0	23,885	13.6	25,010	14.0	25,750	14.2	26,260	14.4	26,520	14.5	26,660

・北区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	鉄西	38.1	7,259	38.7	7,380	39.4	7,510	40.3	7,670	41.0	7,820	41.4	7,880
2	幌北	114.2	23,102	114.5	23,150	115.6	23,390	117.9	23,840	119.9	24,250	121.0	24,480
3	北	121.5	28,210	123.8	28,740	124.4	28,880	123.8	28,730	122.0	28,320	119.0	27,620
4	新川	46.8	27,411	48.2	28,190	48.4	28,360	48.0	28,080	47.0	27,520	45.8	26,800
5	新琴似	86.5	39,533	87.7	40,090	87.4	39,930	85.9	39,270	83.6	38,210	80.6	36,850
6	新琴似西	37.3	17,567	37.7	17,800	37.5	17,700	36.8	17,350	35.6	16,790	34.2	16,130
7	屯田	45.7	35,927	47.3	37,190	48.1	37,790	48.2	37,910	47.8	37,580	47.0	36,940
8	麻生	133.8	19,786	136.9	20,240	138.9	20,540	139.8	20,670	139.9	20,690	138.4	20,460
9	太平百合が原	51.8	16,976	52.8	17,320	53.0	17,360	52.3	17,150	51.0	16,720	49.1	16,110
10	拓北・あいの里	16.4	31,400	16.9	32,500	17.2	32,990	17.2	33,100	17.1	32,900	16.9	32,430
11	篠路	31.1	31,610	31.6	32,100	31.5	32,010	31.0	31,480	30.1	30,610	29.1	29,560

・東区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	鉄東	141.8	21,807	143.7	22,100	143.4	22,040	141.4	21,740	138.7	21,330	135.5	20,830
2	北光	112.8	25,536	113.3	25,650	112.2	25,400	110.0	24,910	107.4	24,320	104.3	23,620
3	北栄	113.2	37,077	113.8	37,260	113.2	37,070	111.6	36,540	109.2	35,760	106.0	34,720
4	栄西	94.8	22,766	95.0	22,820	94.1	22,610	92.4	22,190	89.9	21,590	86.7	20,830
5	栄東	72.9	33,620	73.4	33,850	73.2	33,780	72.4	33,410	70.9	32,720	68.9	31,780
6	元町	99.5	26,673	100.1	26,810	99.8	26,740	98.7	26,450	96.8	25,950	94.2	25,250
7	伏古本町	76.6	32,496	76.2	32,350	75.3	31,930	73.6	31,230	71.2	30,230	68.3	28,980
8	丘珠	11.6	13,418	11.4	13,220	11.2	12,930	10.8	12,540	10.4	12,030	9.9	11,440
9	札苗	15.2	33,907	15.2	33,940	15.1	33,720	14.9	33,150	14.5	32,240	13.9	31,090
10	苗穂東	42.5	8,573	42.6	8,590	42.3	8,520	41.5	8,370	40.4	8,150	38.9	7,850

・白石区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	白石	95.5	38,367	96.0	38,580	95.4	38,330	93.8	37,710	91.6	36,820	88.8	35,700
2	東白石	117.6	29,178	118.4	29,370	117.3	29,100	115.1	28,560	112.4	27,890	109.2	27,080
3	東札幌	133.2	21,242	134.4	21,440	134.0	21,370	132.3	21,110	129.8	20,700	126.3	20,150
4	菊水	94.5	23,184	95.5	23,420	95.2	23,360	94.3	23,130	92.8	22,770	90.7	22,260
5	北白石	60.9	34,728	61.2	34,910	60.9	34,750	60.0	34,230	58.5	33,360	56.5	32,240
6	菊の里	17.1	14,836	17.2	14,870	17.1	14,830	17.0	14,700	16.7	14,420	16.2	14,020
7	北東白石	39.1	19,607	39.1	19,620	38.9	19,500	38.3	19,180	37.1	18,600	35.6	17,850
8	白石東	50.2	23,117	51.0	23,480	51.0	23,490	50.5	23,250	49.6	22,830	48.4	22,300

・厚別区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	厚別中央	91.6	26,878	91.4	26,830	90.4	26,550	88.7	26,050	86.2	25,300	82.7	24,270
2	厚別南	69.1	36,420	68.8	36,280	67.8	35,750	66.2	34,880	63.9	33,710	61.1	32,190
3	厚別西	27.9	22,743	27.7	22,580	27.2	22,180	26.5	21,600	25.6	20,840	24.4	19,880
4	もみじ台	68.5	17,153	67.1	16,810	64.5	16,160	60.9	15,260	56.8	14,220	52.6	13,170
5	青葉	69.1	8,473	67.0	8,220	63.7	7,820	59.7	7,320	54.9	6,730	50.0	6,130
6	厚別東	39.9	16,825	39.4	16,630	38.6	16,280	37.4	15,780	35.8	15,120	34.0	14,340

・豊平区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	豊平	115.6	25,041	116.2	25,190	115.5	25,030	114.0	24,700	112.0	24,260	109.4	23,700
2	美園	121.2	20,245	122.2	20,420	122.1	20,400	120.9	20,200	119.1	19,900	116.3	19,440
3	月寒	110.3	35,124	111.4	35,480	111.3	35,430	110.0	35,030	107.9	34,340	104.9	33,400
4	平岸	149.6	24,904	151.2	25,170	150.8	25,110	149.3	24,850	146.9	24,460	143.7	23,930
5	中の島	91.4	13,159	91.5	13,170	90.6	13,040	88.8	12,790	86.4	12,440	83.4	12,010
6	西岡	16.7	28,367	16.6	28,240	16.3	27,760	15.8	26,940	15.2	25,840	14.4	24,610
7	福住	79.9	16,014	80.2	16,080	79.6	15,970	78.2	15,680	75.9	15,230	73.2	14,680
8	東月寒	14.8	21,102	14.9	21,190	14.8	21,020	14.4	20,570	14.0	19,920	13.5	19,160
9	南平岸	100.0	28,162	100.8	28,410	100.5	28,310	99.1	27,920	96.9	27,290	93.8	26,430

・清田区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	北野	66.6	22,983	67.1	23,160	66.5	22,930	64.9	22,390	62.6	21,590	60.0	20,690
2	清田	5.0	18,927	5.0	19,060	5.0	18,960	4.9	18,730	4.8	18,320	4.7	17,730
3	清田中央	44.3	19,076	45.2	19,490	45.3	19,530	44.7	19,260	43.5	18,740	42.1	18,140
4	平岡	49.0	23,040	49.9	23,470	50.0	23,530	49.5	23,300	48.5	22,820	47.0	22,130
5	里塚・美しが丘	48.5	32,593	49.4	33,240	49.8	33,470	49.7	33,430	49.3	33,180	48.5	32,590

・南区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	真駒内	36.6	26,509	35.1	25,430	33.5	24,210	31.5	22,830	29.5	21,340	27.3	19,770
2	石山	13.0	10,877	12.5	10,430	11.9	9,910	11.1	9,300	10.3	8,600	9.4	7,850
3	篠舞	2.4	5,208	2.3	5,050	2.2	4,820	2.1	4,560	1.9	4,280	1.8	3,980
4	藤野	8.5	19,164	8.2	18,430	7.8	17,520	7.3	16,440	6.8	15,270	6.2	14,040
5	藻岩	12.5	37,595	12.0	36,060	11.4	34,280	10.8	32,220	10.0	29,960	9.2	27,560
6	藻岩下	34.3	5,289	33.0	5,100	31.7	4,900	30.1	4,650	28.2	4,360	26.1	4,030
7	澄川	64.5	29,003	62.1	27,930	59.5	26,790	56.6	25,480	53.4	24,010	49.7	22,370
8	芸術の森地区	3.3	10,772	3.2	10,330	3.0	9,830	2.8	9,240	2.6	8,600	2.4	7,880
9	定山溪	1.9	1,924	1.7	1,790	1.6	1,660	1.5	1,530	1.4	1,400	1.2	1,260

・西区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	八軒	110.4	19,366	112.2	19,690	112.4	19,730	111.3	19,540	109.3	19,180	106.3	18,660
2	琴似二十四軒	139.5	31,474	142.4	32,120	142.6	32,170	141.0	31,800	138.0	31,130	133.6	30,130
3	西町	71.0	43,206	72.0	43,850	72.1	43,870	71.3	43,420	70.0	42,590	68.1	41,460
4	発寒北	41.2	17,850	41.6	18,030	41.4	17,950	40.8	17,650	39.6	17,170	38.2	16,560
5	西野	10.3	36,392	10.2	36,280	10.1	35,650	9.8	34,630	9.4	33,290	9.0	31,800
6	山の手	71.4	19,806	72.1	20,010	71.8	19,930	70.9	19,660	69.2	19,210	67.2	18,630
7	発寒	110.6	27,949	113.3	28,610	114.2	28,840	113.8	28,740	112.3	28,380	110.0	27,790
8	八軒中央	69.8	15,186	70.5	15,350	70.3	15,310	69.4	15,110	67.9	14,770	65.8	14,330

・手稲区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口	人口密度	人口
1	手稲	9.2	7,613	9.2	7,660	9.1	7,590	8.9	7,440	8.7	7,200	8.3	6,900
2	手稲鉄北	51.9	26,606	52.1	26,700	51.5	26,390	50.1	25,690	48.1	24,620	45.8	23,470
3	前田	33.6	28,337	33.6	28,370	33.2	28,030	32.6	27,460	31.5	26,600	30.2	25,440
4	新発寒	59.7	18,103	60.3	18,280	60.0	18,200	59.1	17,920	57.6	17,470	55.4	16,800
5	富丘西宮の沢	33.1	25,750	33.3	25,880	32.9	25,600	32.2	25,060	31.3	24,300	30.1	23,370
6	稲穂金山	10.5	17,782	10.4	17,730	10.3	17,420	10.0	16,960	9.6	16,380	9.2	15,650
7	星置	22.1	15,453	22.2	15,500	22.0	15,330	21.5	15,020	21.0	14,630	20.2	14,100

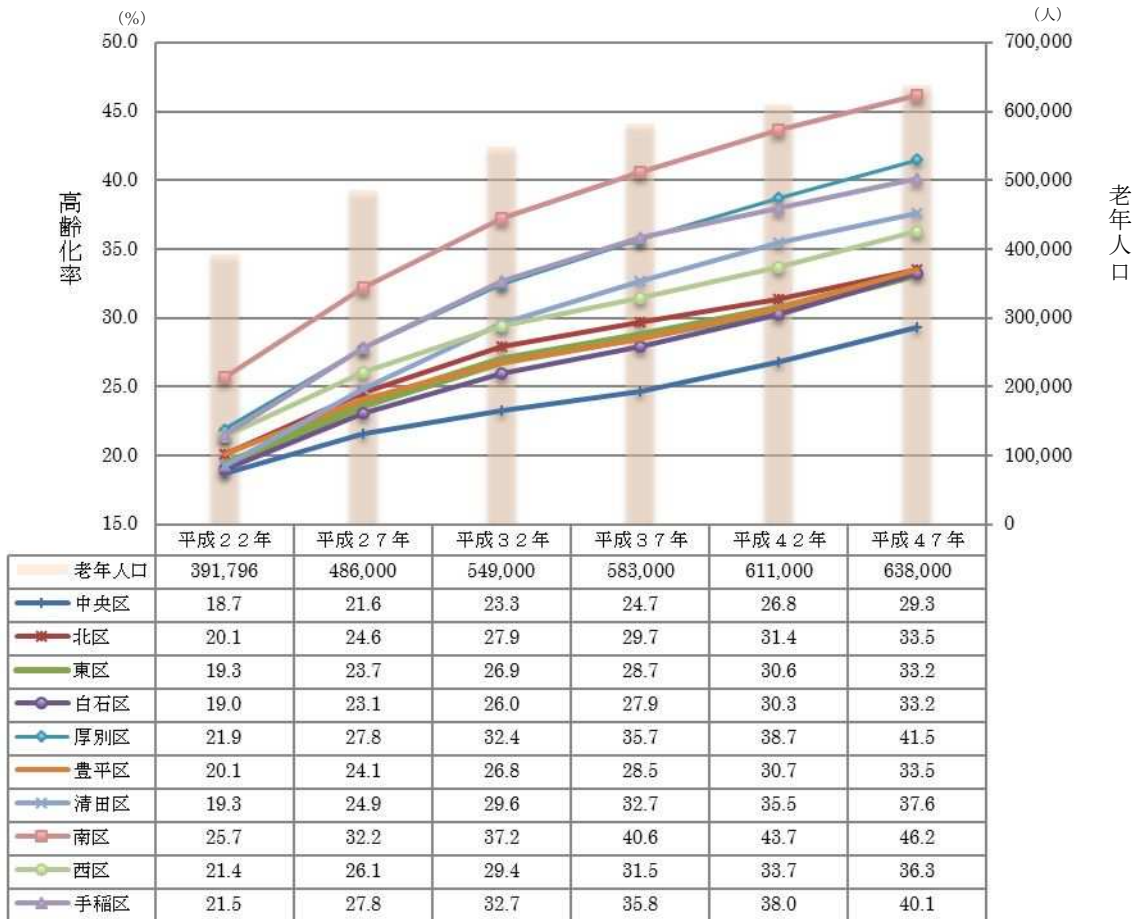
☑ポイント

- ・ 中心部や地下鉄沿線に人口密度 100.0 を超える区域が多く、郊外部では人口密度が低い傾向が見てとれる。
- ・ 中央区と北区の一部などでは平成 22（2010）年に比べて平成 47（2035）年では人口増加、人口密度の上昇がみられるが、その他の地域では平成 22（2010）年に比べて、平成 47（2035）年には人口が減少し、人口密度が低下している。
- ・ 人口が減少している区域でも、平成 22（2010）年に既に減少をはじめている地域と、平成 27（2015）年頃又は平成 32（2020）年頃をピークに減少をはじめるとある。

2 高齢化率の推移

(1) 各区の高齢化率の推移

【表2 各区の高齢化率の推移】



☑ポイント

- ・札幌市全体の高齢化率は、平成22(2010)年の20.5%から平成47(2035)年の35.1%まで上昇。5人に1人が高齢者という状態から、3人に1人が高齢者になる。
- ・札幌市の老年人口は、25年間で約24万6千人が増加する。
- ・高齢化の進展については、区ごとに異なり、個々に精査が必要。

表2は、区別に算出した老年人口の将来推計値をもとに全市の老年人口と各区の高齢化率の推移を示したものである。

全市の老年人口は、平成47(2035)年まで右肩上がりに増加を続け、25年間で約24万6千人増加する見込みとなっている。平成25(2013)年3月に社人研が公表した各自治体の将来推計人口をみると、多くの自治体では増加を続けてきた老年人口

が、一定の時期を境に減少に転じる¹⁴が、札幌市では一貫して増加を続けることがわかる。札幌市でも区別の老年人口をみると、南区だけが平成 47（2035）年頃には減少に転じる見込みである。

札幌市における高齢化については、すべての区で高齢化率の上昇が進み、とりわけ南区、厚別区及び手稲区では、平成 47（2035）年までに高齢化率が 4 割を超える予想され、地域のまちづくり活動においても「高齢者福祉（見守り）」や「生活支援（買物支援や除雪）」などのニーズが高まると予想される。

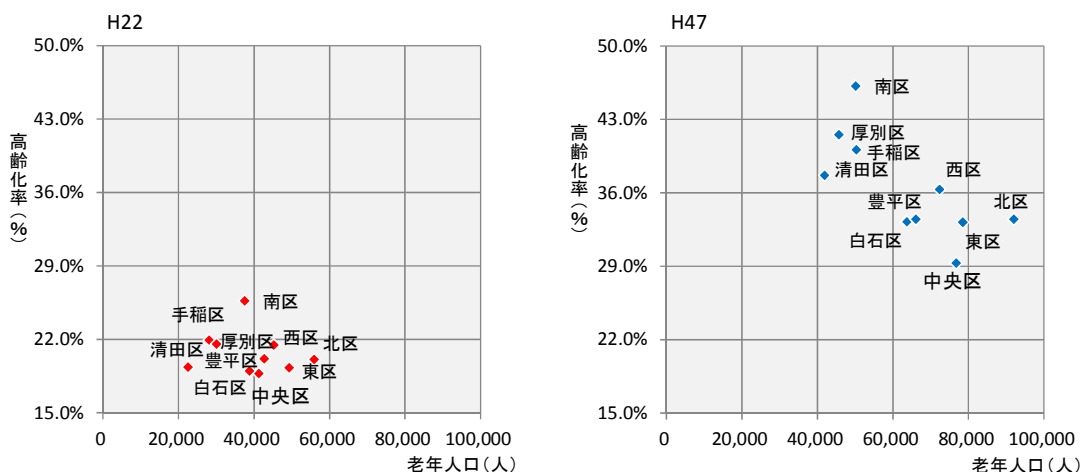
また、平成 22（2010）年時点では高齢化率が低い区でも、平成 47（2035）年には高齢化率が 4 割に近づく区もあり、特に清田区や手稲区の上昇傾向は急速なものが見込まれ、将来を想定したまちづくりがより喫緊の課題となることを示唆している。

(2) 区別老年人口と高齢化率の推移

図 7 は、区別の高齢化率（縦軸）と老年人口（横軸）の関係を表したものである。すべての区が平成 22（2010）年度から平成 47（2035）年度になるにつれ、右上にシフトしているが、区によってシフトの角度や位置が異なるほか、数値の差が大きくなり、分散が拡大していることがわかる。

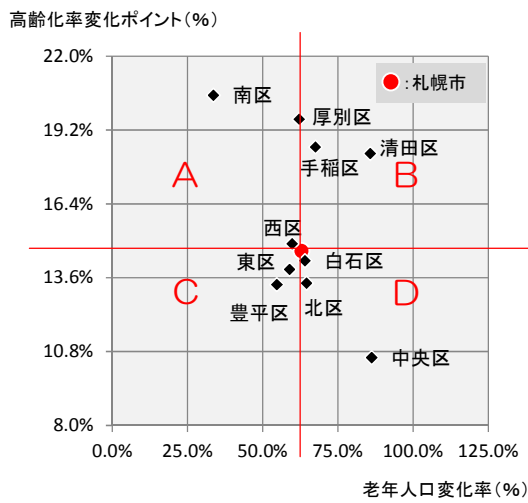
例えば、南区では高齢化率の上昇は大きいものの、老年人口の増加数は他区に比べて比較的小さいことが分かる。一方で中央区は高齢化率の上昇が他区に比べて小さいものの、老年人口の増加数が比較的大きいことが分かる。

【図 7 区別老年人口及び高齢化率の推移】



¹⁴ 例えば、函館市では、平成 32（2020）年をピークに老年人口が減少に転じ、平成 47（2035）年は平成 22（2010）年の老年人口を下回る見込み。小樽市でも平成 32（2020）年、旭川市は平成 37（2025）年頃をピークに減少に転じる。「日本の地域別将来推計人口（平成 25（2013）年 3 月）」国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson13/t-page.asp>

次の図は、高齢化率変化ポイントと老年人口の変化率を表したものである。中心に赤丸で札幌市平均を表している。



札幌市平均を基準に 4 つのグループに分けたとき、以下の特徴が言える。

札幌市平均よりも左上に位置する A グループは老年人口の変化率は平均以下であるものの、高齢化率が平均以上に上昇している。これは年少・生産年齢人口の減少が大きく、相対的に高齢化率が上昇している状況が想像できる。

これに対して、D グループは老年人口が増加しているものの、年少・生産年齢人口が出生や社会的要因により横ばい・増加していることで高齢化率が極端に上昇していない状況が想像できる。

B グループは老年人口の増加及び高齢化率の上昇がともに平均以上に高くなっており、高齢化の進展が急であるという傾向を表している。

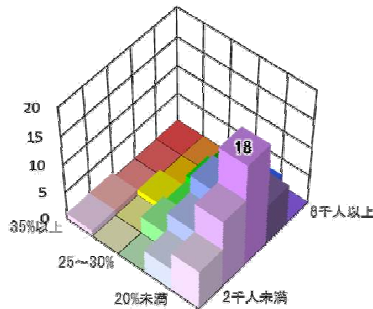
C グループは、高齢化が進んでいるものの、その進捗は市平均と比べて顕著ではないことを示している。

(3) まちづくりセンター区域別老年人口と高齢化率

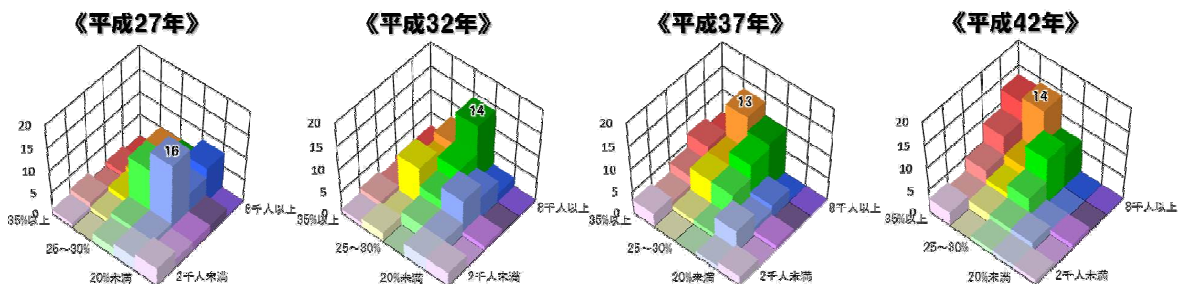
図 8 は、老年人口と高齢化率の状況からみたまちづくりセンター区域の動向を示したものである。色が濃くなるに従って老年人口が多く、赤色に近くなるに従って高齢化率が高い区域であることを示す。

【図 8 老年人口と高齢化率からみたまちづくりセンター区域別の動向】

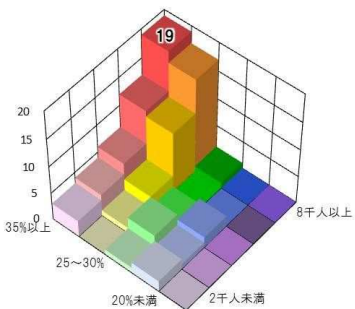
ア 平成 22 (2010) 年 (数字は箇所数)



老年人口 老年割合	2千人未満	2千人以上 4千人未満	4千人以上 6千人未満	6千人以上 8千人未満	8千人以上
35%以上	1	1	0	0	0
30~35%	0	0	1	0	0
25~30%	0	3	2	3	2
20~25%	4	7	10	7	2
20%未満	7	12	18	7	0



イ 平成 47 (2035) 年 (数字は箇所数)



老年人口 老年割合	2千人未満	2千人以上 4千人未満	4千人以上 6千人未満	6千人以上 8千人未満	8千人以上
30~35%	3	4	8	12	19
25~30%	0	1	3	11	17
20~25%	1	3	1	0	1
20%未満	2	1	2	0	0
30~35%	0	0	0	0	0

☑ポイント

- ・平成 22 (2010) 年は、高齢化率が 25%を下回る地域が大半で、既に高齢化率が 35%を超えている地域においても、老年人口は比較的少ない傾向にある。
- ・平成 47 (2035) 年には、平成 22 (2010) 年に比べて急速な高齢化の進展がみてとれ、大半の区域で 3~4 人に 1 人以上が高齢者という時代になる。また、約半分の区域で高齢化率が 35%以上となっている。

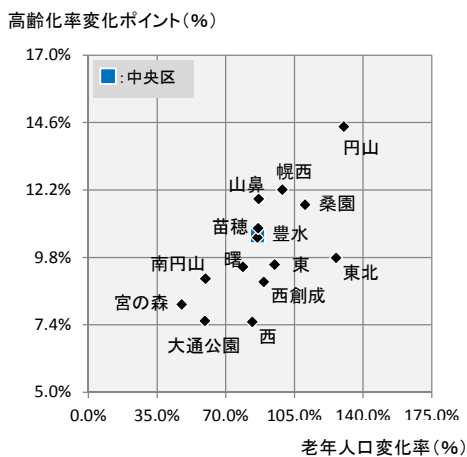
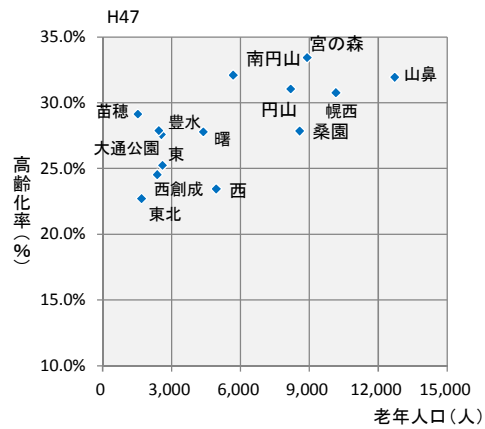
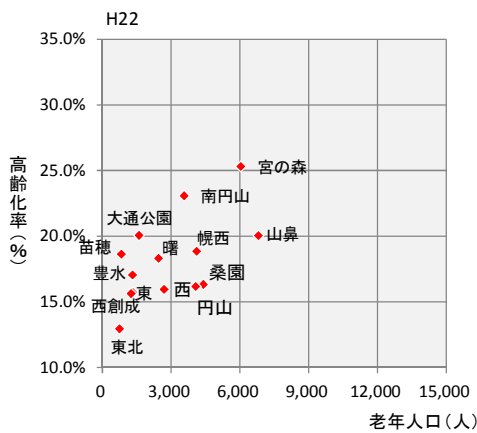
ウ 区別・まちづくりセンター区域別の老年人口と高齢化率の状況

表3は、色が濃くなるにつれ老年人口が多く、赤色に近くなるにつれ高齢化率が高いことを示しており、下記の表で地域ごとの高齢化の推移が把握できる。

【表3、図9 まちづくりセンター区域別老年人口（人）と高齢化率（％）の動向】

・中央区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	大通公園	1,606	20.0	1,900	22.2	2,080	23.5	2,230	24.6	2,370	25.8	2,560	27.6
2	東北	747	12.9	950	15.0	1,120	16.6	1,260	18.0	1,440	19.8	1,690	22.7
3	苗穂	822	18.6	1,010	21.4	1,140	23.1	1,240	24.4	1,380	26.5	1,530	29.1
4	東	1,334	15.7	1,640	17.9	1,860	19.4	2,030	20.5	2,260	22.2	2,600	25.2
5	豊水	1,314	17.0	1,660	20.2	1,920	22.6	2,110	24.3	2,270	25.8	2,450	27.9
6	西創成	1,256	15.6	1,600	18.5	1,870	20.6	2,030	21.6	2,150	22.4	2,380	24.5
7	曙	2,451	18.3	3,090	21.6	3,500	23.4	3,760	24.5	4,040	25.8	4,380	27.8
8	山鼻	6,809	20.0	8,630	23.8	9,710	25.7	10,720	27.5	11,800	29.8	12,720	31.9
9	幌西	4,117	18.8	5,260	22.4	6,080	24.7	6,640	26.0	7,430	28.5	8,190	31.1
10	西	2,697	15.9	3,390	18.4	3,890	20.1	4,170	20.7	4,460	21.5	4,950	23.4
11	南円山	3,565	23.1	4,080	25.0	4,400	26.1	4,730	27.3	5,170	29.4	5,690	32.1
12	円山	4,414	16.3	5,610	19.2	6,580	21.4	7,520	23.6	8,730	26.8	10,160	30.8
13	桑園	4,077	16.2	5,260	19.3	6,170	21.6	6,810	23.0	7,630	25.1	8,580	27.8
14	宮の森	6,041	25.3	6,790	27.2	7,150	27.8	7,550	28.8	8,230	31.0	8,910	33.4

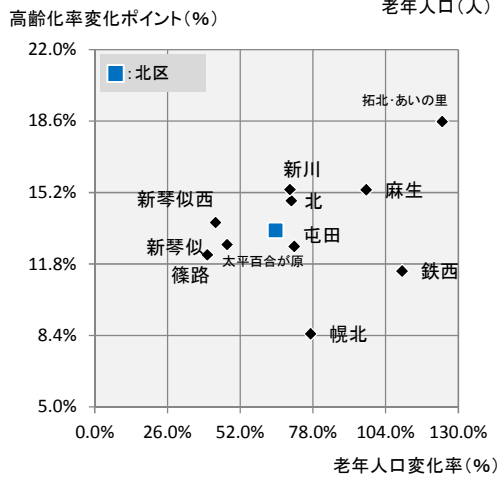
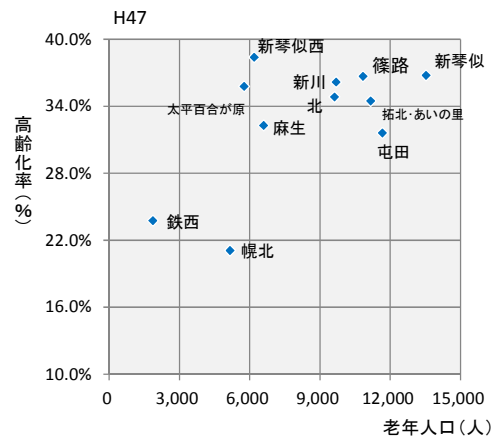
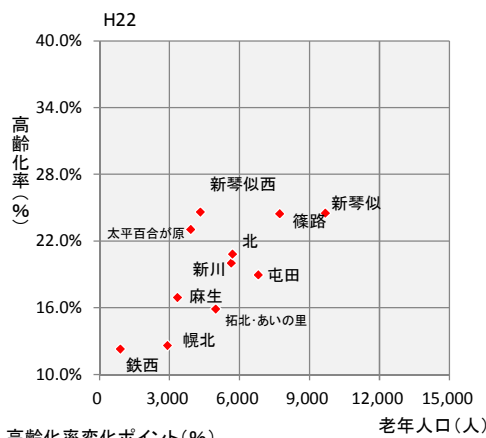


左記の図では、高齢化率の変化ポイントと老年人口の変化率を表した（中心に区平均を表示）。

中央区ではすべての地区で将来に渡っても人口増加が見込まれている。そのため、東北地区のように老年人口が増えても、高齢化率の上昇が顕著にならない地区が見受けられる。

・北区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	鉄西	891	12.3	1,130	15.3	1,360	18.1	1,520	19.8	1,710	21.9	1,870	23.7
2	幌北	2,912	12.6	3,560	15.4	4,120	17.6	4,470	18.8	4,810	19.8	5,160	21.1
3	北	5,649	20.0	7,030	24.5	8,040	27.8	8,690	30.3	9,130	32.2	9,620	34.8
4	新川	5,706	20.8	7,330	26.0	8,370	29.5	8,740	31.1	9,160	33.3	9,690	36.2
5	新琴似	9,688	24.5	11,910	29.7	13,090	32.8	13,400	34.1	13,530	35.4	13,540	36.7
6	新琴似西	4,322	24.6	5,430	30.5	6,100	34.5	6,270	36.1	6,260	37.3	6,190	38.4
7	屯田	6,811	19.0	8,400	22.6	9,530	25.2	10,220	27.0	10,870	28.9	11,670	31.6
8	麻生	3,349	16.9	4,190	20.7	4,910	23.9	5,380	26.0	5,960	28.8	6,600	32.3
9	太平百合が原	3,910	23.0	5,060	29.2	5,670	32.7	5,710	33.3	5,640	33.7	5,760	35.8
10	拓北・あいの里	4,982	15.9	6,450	19.9	8,100	24.6	9,570	28.9	10,590	32.2	11,170	34.4
11	篠路	7,726	24.4	9,480	29.5	10,500	32.8	10,630	33.8	10,630	34.7	10,840	36.7

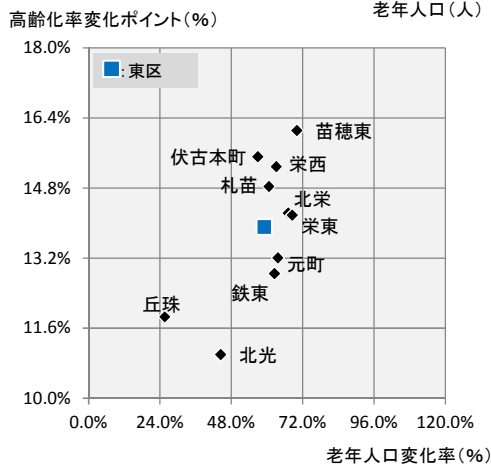
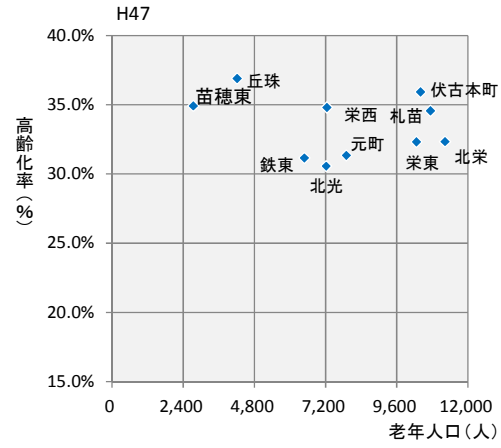
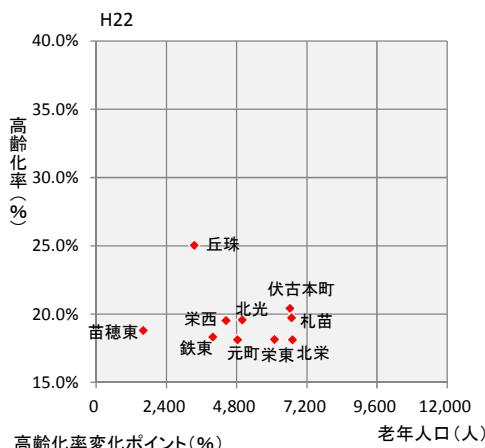


北区は、鉄西地区、幌北地区が他の地区と異なる状況にある。鉄西地区、幌北地区は、平成47（2035）年まで一貫して人口の増加傾向が続く地区であり、その人口増加に伴い、老年人口数が増加するものの、高齢化率は他の地区に比べて低い。

この2つの地区以外では拓北・あいの里地区の高齢化の進展が顕著なものになっている。新興住宅地として開発され、同年代の住人が一斉に居住を始めたことが要因と推測されるが、近年、同じように住宅開発が進んだ屯田地区などと比べても高齢化率の上昇幅が大きく、老年人口の増加率が高くなっている。

・東区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	鉄東	3,993	18.3	4,860	22.0	5,360	24.3	5,780	26.6	6,130	28.7	6,490	31.2
2	北光	4,998	19.6	5,930	23.1	6,570	25.9	6,760	27.1	6,930	28.5	7,220	30.6
3	北栄	6,717	18.1	8,180	22.0	9,230	24.9	9,820	26.9	10,430	29.2	11,230	32.3
4	栄西	4,444	19.5	5,520	24.2	6,200	27.4	6,540	29.5	6,870	31.8	7,250	34.8
5	栄東	6,096	18.1	7,610	22.5	8,540	25.3	8,930	26.7	9,490	29.0	10,270	32.3
6	元町	4,834	18.1	5,890	22.0	6,620	24.8	6,940	26.2	7,280	28.1	7,910	31.3
7	伏古本町	6,633	20.4	8,380	25.9	9,480	29.7	9,920	31.8	10,090	33.4	10,410	35.9
8	丘珠	3,359	25.0	4,050	30.6	4,380	33.9	4,390	35.0	4,320	35.9	4,220	36.9
9	札苗	6,684	19.7	8,400	24.8	9,710	28.8	10,150	30.6	10,490	32.5	10,740	34.5
10	苗穂東	1,611	18.8	2,080	24.2	2,390	28.1	2,560	30.6	2,670	32.8	2,740	34.9

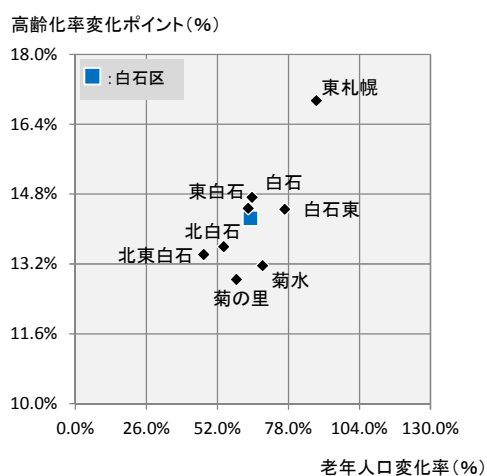
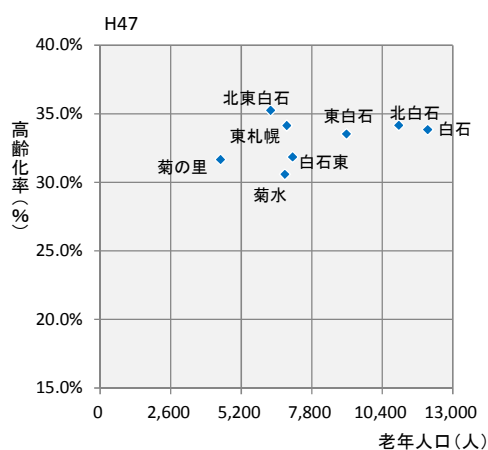
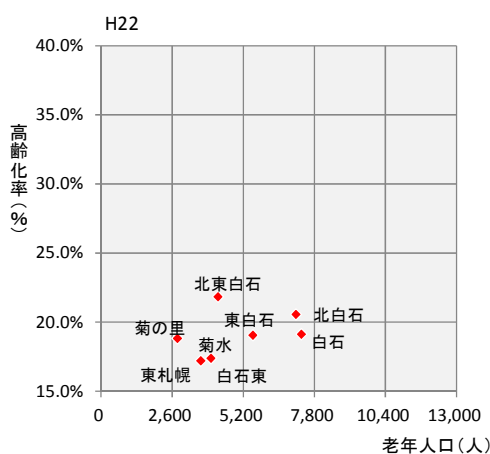


平成 22 (2010) 年における高齢化率の状況を見ると、東区では丘珠地区を除き、概ね高齢化率が 20%前後にあり、地域による大きな差異は見られないものの、平成 47 (2035) 年になると、鉄東地区、北光地区及び元町地区といった地下鉄駅を含む地区とそれ以外の地区で差が生じ始める。これらは、高齢化率の上昇幅に差が生じていることからみとれる。

また、もともと高齢化率が高い丘珠地区では、平成 37 (2025) 年頃から老年人口が減少に転じる見込みであり、平成 47 (2035) 年までの高齢化率の上昇幅が小さく、老年人口の増加率が比較的低くなっている。

・白石区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	白石	7,334	19.1	8,900	23.1	9,980	26.0	10,750	28.5	11,460	31.1	12,080	33.8
2	東白石	5,560	19.1	6,640	22.6	7,410	25.5	7,890	27.6	8,480	30.4	9,080	33.5
3	東札幌	3,655	17.2	4,480	20.9	5,130	24.0	5,590	26.5	6,170	29.8	6,880	34.1
4	菊水	4,041	17.4	4,940	21.1	5,500	23.5	5,800	25.1	6,240	27.4	6,810	30.6
5	北白石	7,137	20.6	8,760	25.1	9,680	27.9	10,060	29.4	10,480	31.4	11,010	34.2
6	菊の里	2,793	18.8	3,450	23.2	3,860	26.0	4,040	27.5	4,230	29.3	4,440	31.7
7	北東白石	4,279	21.8	5,440	27.7	6,150	31.5	6,270	32.7	6,230	33.5	6,290	35.2
8	白石東	4,019	17.4	4,930	21.0	5,580	23.8	6,040	26.0	6,580	28.8	7,100	31.8

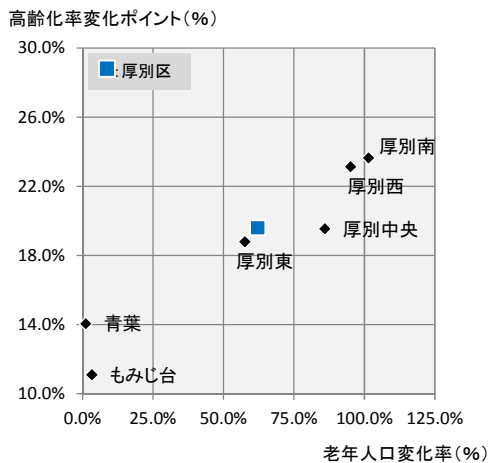
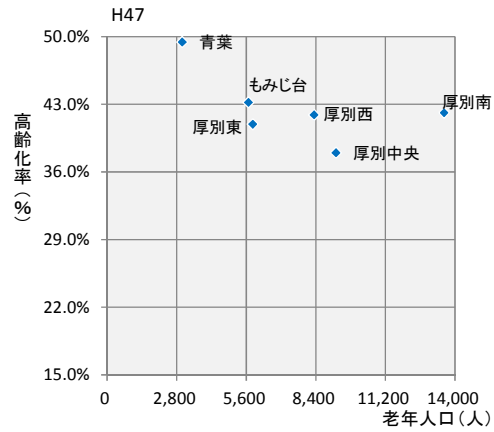
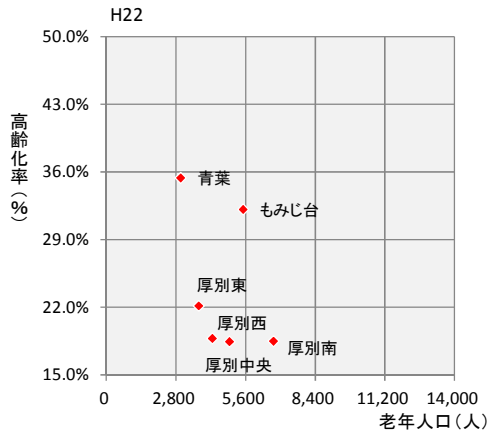


白石区では、平成 22（2010）年時点で北東白石地区の高齢化率が高く、平成 47（2035）年まで高い水準で推移する見込みである。

一方で、その間の高齢化率の上昇幅という点では、区内他地区に比して東札幌地区の数値が高くなっている。白石区には、菊水地区や白石東地区など地下鉄駅を有する地区はほかにあるものの、その中でも東札幌地区に顕著な傾向がみられる。

・厚別区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	厚別中央	4,958	18.4	6,230	23.2	7,250	27.3	8,030	30.8	8,730	34.5	9,220	38.0
2	厚別南	6,730	18.5	8,800	24.3	10,580	29.6	12,000	34.4	13,010	38.6	13,560	42.1
3	厚別西	4,269	18.8	5,540	24.5	6,800	30.7	7,630	35.3	8,090	38.8	8,330	41.9
4	もみじ台	5,507	32.1	6,590	39.2	6,820	42.2	6,490	42.5	6,060	42.6	5,690	43.2
5	青葉	2,997	35.4	3,560	43.3	3,660	46.8	3,530	48.2	3,260	48.4	3,030	49.4
6	厚別東	3,724	22.1	4,670	28.1	5,260	32.3	5,520	35.0	5,700	37.7	5,870	40.9



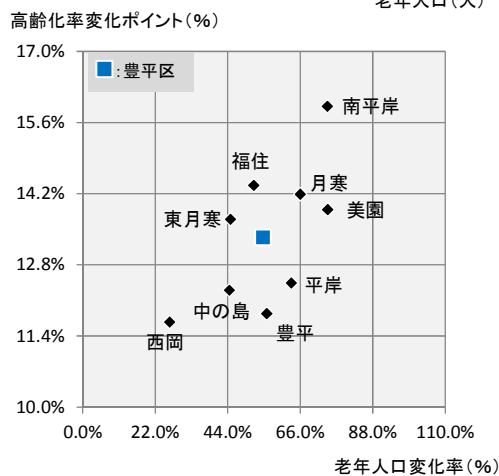
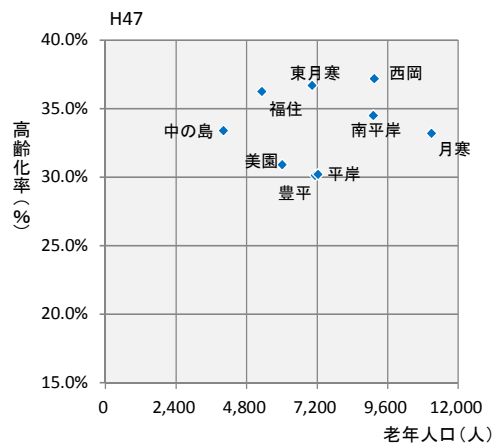
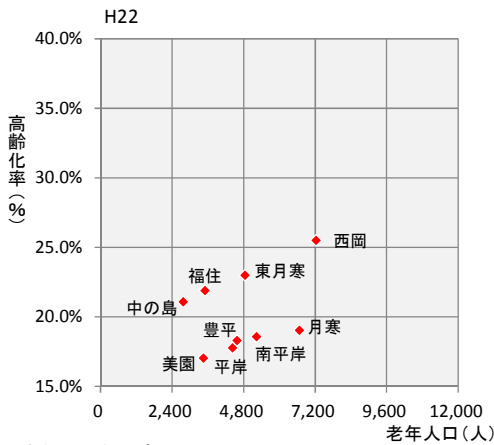
厚別区の現状は、青葉地区やもみじ台地区の高齢化率が群を抜いて高い状況にあり、平成 47 (2035) 年でも依然として高いものの、他の地区との差異が小さくなる見込みである。

この 2 つの地区では、生産年齢人口の減少などを背景に平成 32 (2020) 年頃から老年人口が減少していくと推計されており、その結果、高齢化率の上昇幅が小さく、老年人口の増加率が相対的に低く抑えられたことが要因と考えることができる。

なお、区全体として高齢化率が高く、厚別中央地区以外では、平成 47 (2035) 年に高齢化率が 40%を超えている。

・豊平区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	豊平	4,580	18.3	5,470	21.7	5,990	23.9	6,270	25.4	6,660	27.5	7,140	30.1
2	美園	3,448	17.0	4,120	20.2	4,640	22.8	5,010	24.8	5,440	27.3	6,010	30.9
3	月寒	6,679	19.0	8,040	22.7	9,000	25.4	9,600	27.4	10,280	29.9	11,090	33.2
4	平岸	4,426	17.8	5,250	20.9	5,840	23.3	6,200	25.0	6,670	27.3	7,230	30.2
5	中の島	2,775	21.1	3,330	25.3	3,670	28.1	3,760	29.4	3,850	31.0	4,010	33.4
6	西岡	7,236	25.5	8,730	30.9	9,370	33.8	9,370	34.8	9,270	35.9	9,150	37.2
7	福住	3,503	21.9	4,210	26.2	4,590	28.7	4,830	30.8	5,090	33.4	5,320	36.2
8	東月寒	4,853	23.0	5,800	27.4	6,240	29.7	6,390	31.1	6,680	33.5	7,030	36.7
9	南平岸	5,234	18.6	6,610	23.3	7,540	26.6	8,100	29.0	8,570	31.4	9,120	34.5

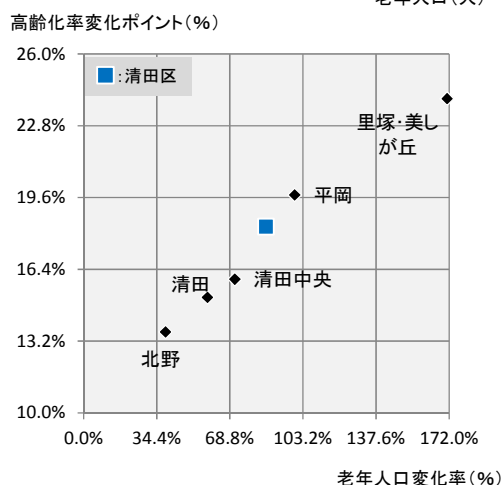
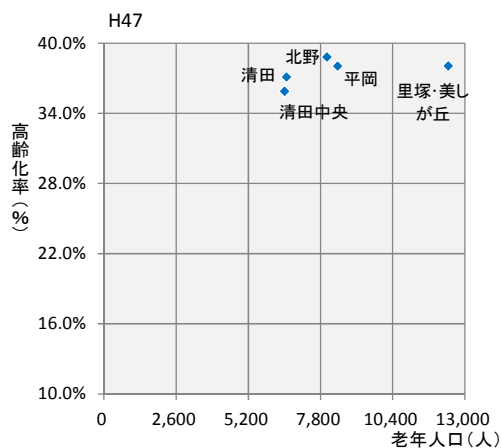
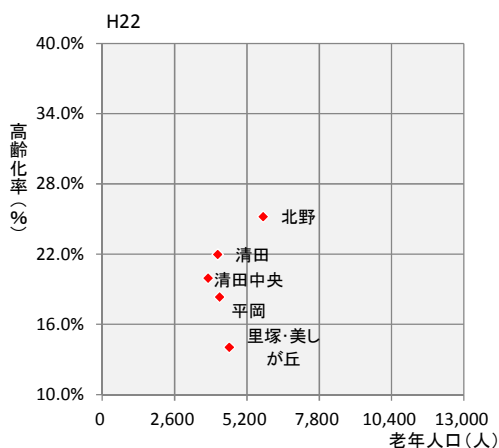


豊平区には地下鉄駅を有する地区であっても、平成 47（2035）年までの 25 年間で高齢化率の上昇幅が大きい福住地区や月寒地区、美園地区といった地区がある一方、中の島や平岸、豊平地区では上昇幅が少ないという傾向の違いがみられる。その中でも南平岸地区の高齢化の進行が最も顕著といえる。

一方で、西岡地区については、他の地区が平成 47（2035）年まで老年人口が一貫して増加するのに対して、平成 37（2025）年頃から老年人口も減少を始め、傾向として高齢化率の高い厚別区の青葉地区、もみじ台地区と同様に増加率が抑えられている。

・清田区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	北野	5,794	25.2	7,080	30.6	7,760	33.8	7,880	35.2	7,930	36.7	8,030	38.8
2	清田	4,157	22.0	5,160	27.1	5,800	30.6	6,180	33.0	6,430	35.1	6,580	37.1
3	清田中央	3,803	19.9	5,070	26.0	5,960	30.5	6,280	32.6	6,430	34.3	6,510	35.9
4	平岡	4,224	18.3	5,740	24.5	6,980	29.7	7,720	33.1	8,200	35.9	8,420	38.1
5	里塚・美しが丘	4,575	14.0	6,490	19.5	8,520	25.5	10,260	30.7	11,690	35.2	12,400	38.1

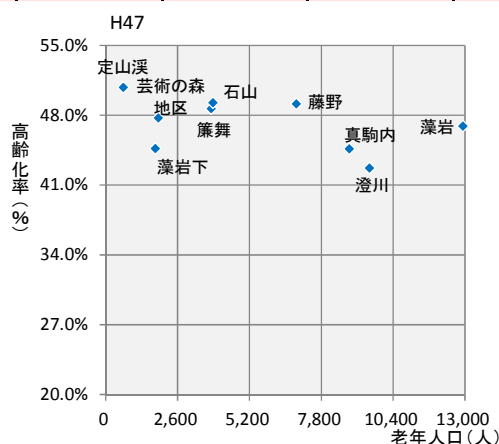
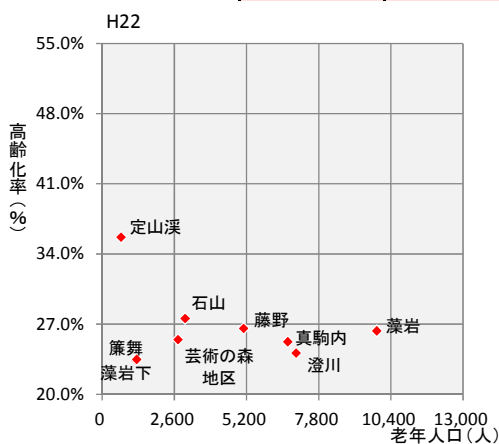


清田区では、平成 22 (2010) 年時点で高齢化率に地区差があるが、平成 47 (2035) 年にはその差が小さくなっている。

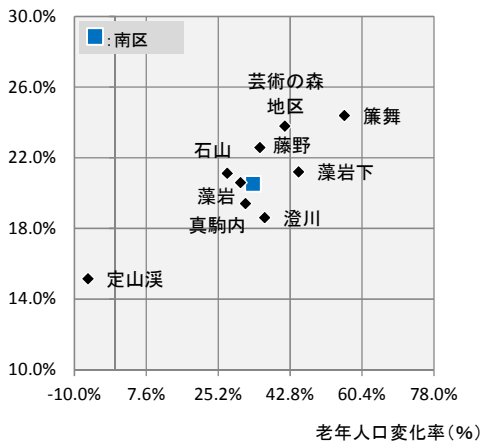
高齢化率の上昇幅などをみると、里塚・美しが丘地区や平岡地区といった近年、住宅開発のあった地区で急速に高齢化が進行し、ほかの地区との差異が埋まっていくことが予想される。

・南区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	真駒内	6,688	25.2	7,880	31.0	8,420	34.8	8,660	37.9	8,910	41.8	8,820	44.6
2	石山	2,997	27.6	3,740	35.9	4,130	41.7	4,230	45.5	4,080	47.4	3,820	48.7
3	簾舞	1,217	23.4	1,480	29.3	1,660	34.4	1,750	38.4	1,860	43.5	1,900	47.7
4	藤野	5,095	26.6	6,180	33.5	6,860	39.2	7,090	43.1	7,170	47.0	6,900	49.2
5	藻岩	9,896	26.3	11,940	33.1	13,190	38.5	13,430	41.7	13,340	44.5	12,930	46.9
6	藻岩下	1,242	23.5	1,510	29.6	1,700	34.7	1,800	38.7	1,840	42.2	1,800	44.7
7	澄川	6,992	24.1	8,410	30.1	9,150	34.2	9,370	36.8	9,560	39.8	9,550	42.7
8	芸術の森地区	2,742	25.5	3,430	33.2	3,940	40.1	4,110	44.5	4,060	47.2	3,880	49.2
9	定山溪	686	35.7	770	43.0	790	47.6	760	49.7	710	50.7	640	50.8



高齢化率変化ポイント(%)

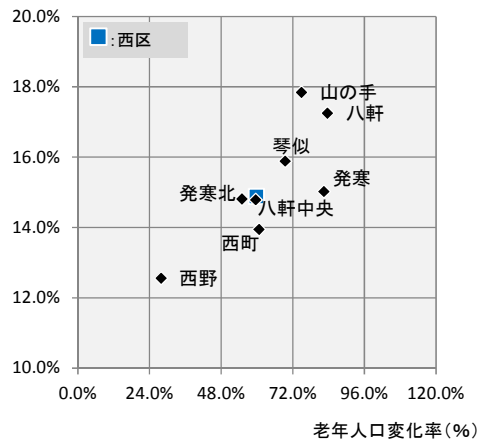
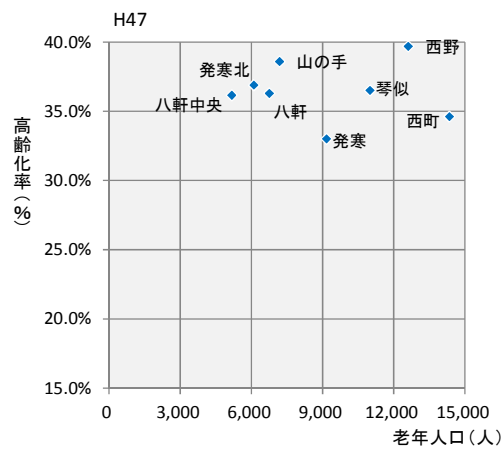
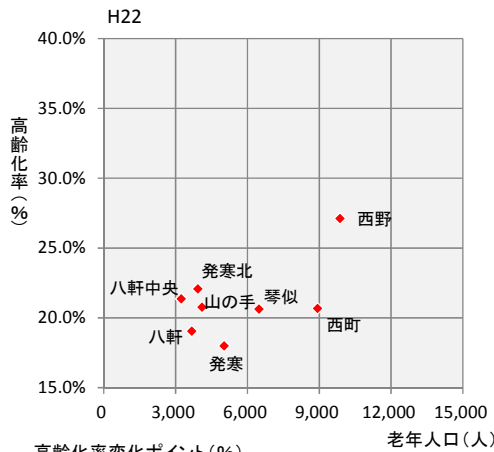


南区は区全体として高齢化率が高く、平成 47 (2035) 年には定山溪地区が高齢化率 50%を超えるほか、40%後半の地区が大半を占める。

その中で地下鉄駅を有する澄川地区、真駒内地区の高齢化率の上昇幅がやや小さい傾向にあるほか、大半の地区で平成 37 (2025) 年頃に老年人口の減少が始まることから、区平均では老年人口の増加率が比較的低下している。

・西区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	八軒	3,686	19.0	4,720	24.0	5,460	27.7	5,950	30.5	6,400	33.4	6,770	36.3
2	琴似二十四軒	6,491	20.6	8,030	25.0	9,090	28.3	9,790	30.8	10,460	33.6	11,000	36.5
3	西町	8,929	20.7	10,930	24.9	12,280	28.0	12,910	29.7	13,560	31.8	14,350	34.6
4	発寒北	3,942	22.1	5,010	27.8	5,700	31.8	5,870	33.3	6,010	35.0	6,110	36.9
5	西野	9,872	27.1	11,960	33.0	12,940	36.3	12,990	37.5	12,760	38.3	12,620	39.7
6	山の手	4,110	20.8	5,030	25.1	5,700	28.6	6,230	31.7	6,740	35.1	7,190	38.6
7	発寒	5,025	18.0	6,290	22.0	7,190	24.9	7,720	26.9	8,400	29.6	9,170	33.0
8	八軒中央	3,244	21.4	3,970	25.9	4,500	29.4	4,800	31.8	5,000	33.9	5,180	36.2

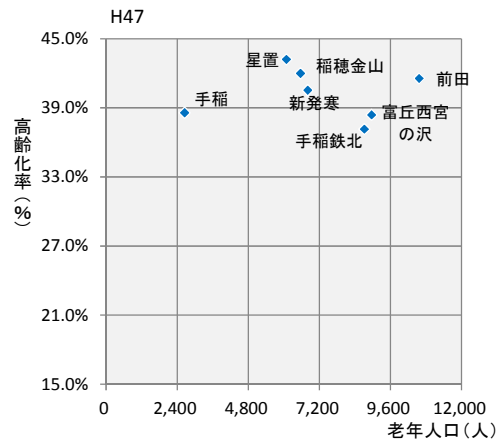
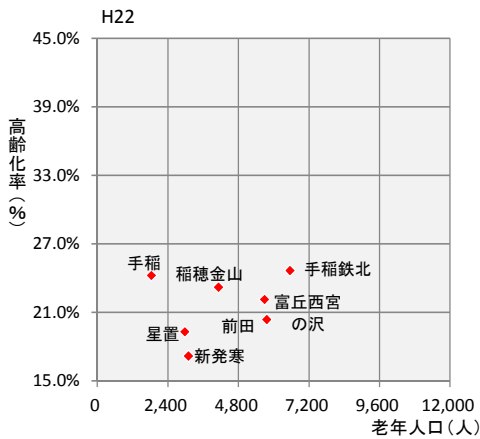


西区では、平成 22 (2010) 年時点で西野地区の高齢化率の高さが見受けられるが、平成 47 (2035) 年には多くの地区で高齢化率が 35%超となり、西野地区との差が小さくなる。

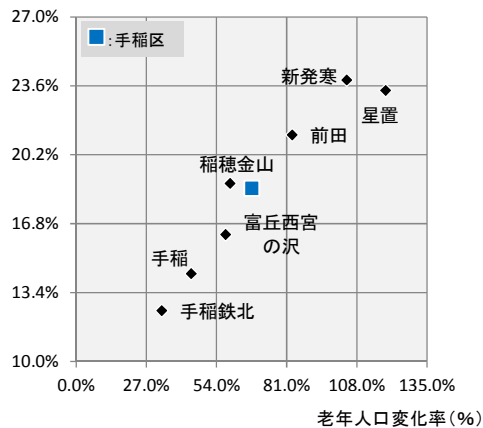
その中でも山の手地区、八軒地区では、高齢化率の上昇幅が大きく、特に山の手地区は、平成 42 (2030) 年に老年人口が減少に転じる西野地区に迫る勢いで高齢化率が上昇する。

・手稲区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合	老年人口	割合
1	手稲	1,844	24.2	2,270	29.6	2,540	33.5	2,640	35.5	2,660	36.9	2,660	38.6
2	手稲鉄北	6,559	24.7	8,150	30.5	8,880	33.7	8,860	34.5	8,660	35.2	8,720	37.2
3	前田	5,772	20.4	7,910	27.9	9,710	34.6	10,580	38.5	10,770	40.5	10,570	41.6
4	新発寒	3,108	17.2	4,450	24.3	5,710	31.4	6,500	36.3	6,770	38.8	6,810	40.5
5	富丘西宮の沢	5,695	22.1	7,030	27.2	7,850	30.7	8,220	32.8	8,590	35.4	8,970	38.4
6	稲穂金山	4,126	23.2	5,140	29.0	5,860	33.6	6,260	36.9	6,510	39.7	6,570	42.0
7	星置	2,983	19.3	4,030	26.0	4,740	30.9	5,420	36.1	5,980	40.9	6,090	43.2



高齢化率変化ポイント(%)



手稲区は、平成 22 (2010) 年と平成 47 (2035) 年の高齢化率の分布に他区と異なる顕著な特徴がある。例えば、平成 22 (2010) 年に高齢化率が最も高い手稲鉄北地区が、平成 47 (2035) 年には最も高齢化率が低くなるといった、逆転現象が生じている。これは、宅地開発の時期が比較的新しい地域を有する手稲鉄北地区では、平成 22 (2010) 年時点の人口構成で、平成 47 (2035) 年には加齢により高齢者となる 40～50 歳代が相対的に少ないことが影響していると推測される。

こうした現象は、平成 22 (2010) 年と平成 47 (2035) 年と比較したときの高齢化率の上昇幅の地区差が大きいことにも表れており、最も上昇幅の大きい新発寒地区と、手稲鉄北地区とでは上昇ポイントで約 2 倍の差がある。

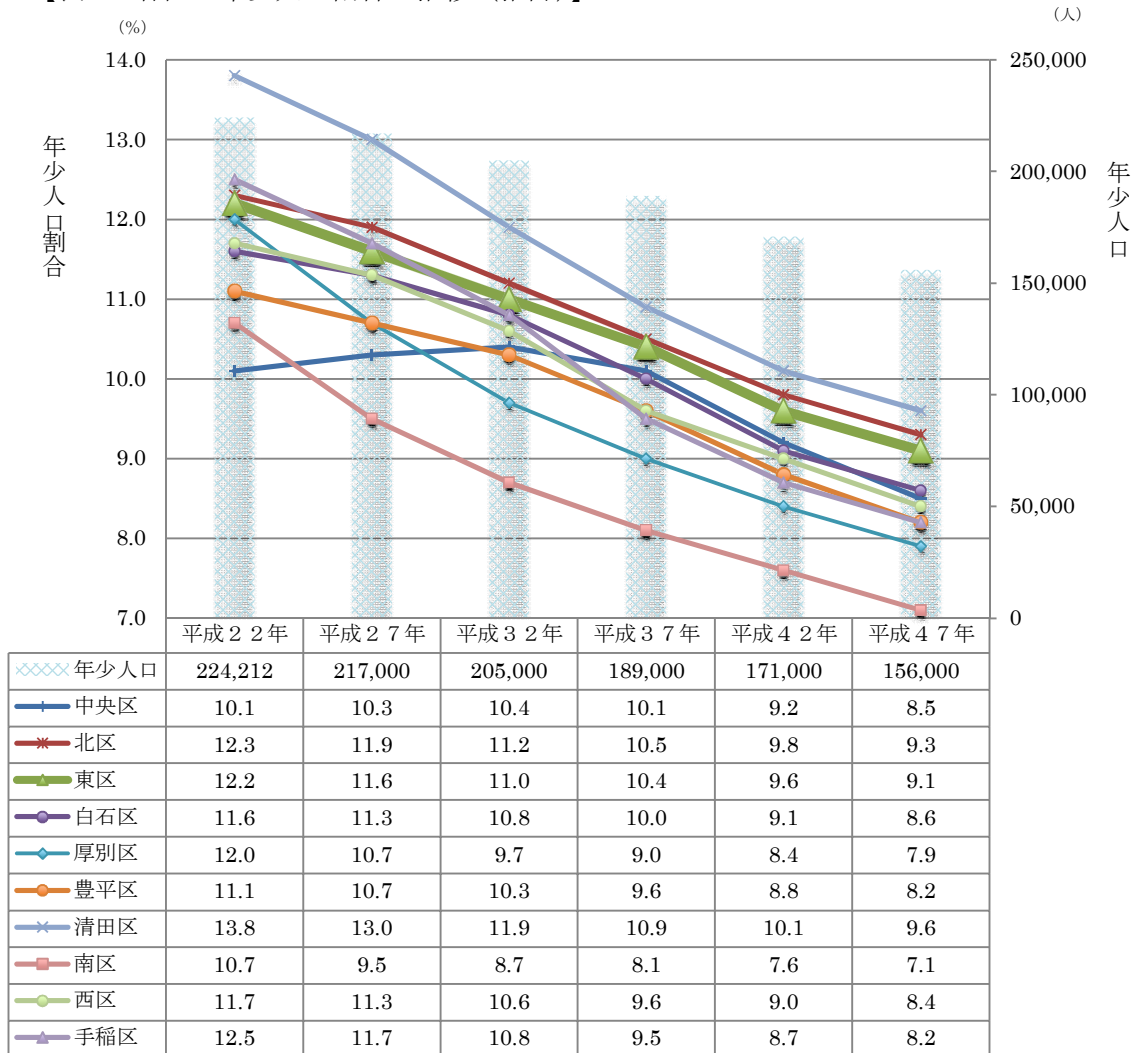
☑ポイント

- すべての地域で高齢化率は平成 22（2010）年から平成 47（2035）年に向けて上昇しており、平成 47（2035）年には厚別区、清田区、南区、手稲区の全ての区域において、高齢化率が 35.0%を超えている。
- 平成 22（2010）年と平成 47（2035）年の老年人口を比較すると、すべてのまちづくりセンター区域で増加しているが、平成 22（2010）年時点で高齢化率が高い地域の中には、増加傾向だった老年人口が平成 32（2020）年頃をピークに減少傾向となっている地域もある。これは、高齢者になっていく人口そのものが減少していることに起因すると推測される。

3 少子化の推移

(1) 各区の少子化の推移

【表4 各区の年少人口割合の推移（推計）】



☑ポイント

- ・年少人口割合は、平成22（2010）年の11.7%から平成47（2035）年の8.6%まで低下（▲3.1%）
- ・年少人口数で換算すると、25年間で約6万8千人の年少人口が減少する。

札幌市における少子化の進捗については、中央区を除いて既に年少人口割合が低下傾向であり、平成47（2035）年には全区で年少人口が減少する見込みである。

特に清田区や手稲区は、平成22（2010）年の年少人口割合が、25年後（平成47（2035）年）と比較すると約4%程度低下することが見込まれ、子どもに関する施設や取組（学校

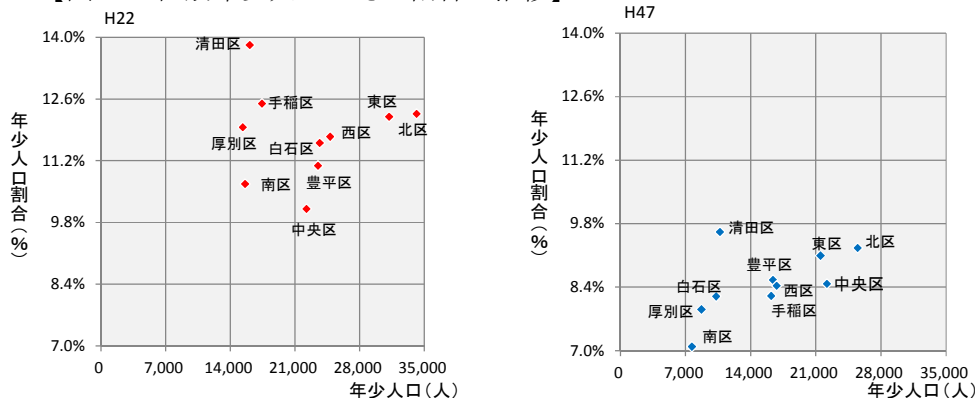
や保育園、子育てサロン¹⁵、公園) のあり方の検討とともに、将来に向けて子どもを増やしていくための施策などの検討が求められる。

¹⁵ 【子育てサロン】 子育て中の親子が気軽に集い、自由に交流や情報交換ができる場。

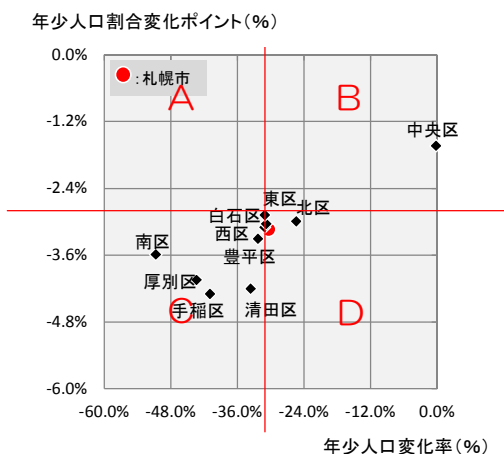
(2) 区別年少人口と年少人口割合の推移

区別の年少人口割合（縦軸）と年少人口（横軸）の関係を表したものである。すべての区が平成 22（2010）年度から平成 47（2035）年度になるにつれ、総じて左下に移動しているが、中央区だけはほぼ真下に移動していることが分かる。

【図 10 区別年少人口とその割合の推移】



次の表は、年少人口割合の変化ポイントと年少人口の変化率を表したものである。中心に赤丸で札幌市平均を表している。



札幌市平均を基準に 4 つのグループに分けたとき、多くは B と C に分類され、それぞれ以下の特徴が言える。

年少人口割合はどの区でも低下傾向にあるものの、B グループについては年少人口割合の変化や年少人口の変化率が小さく、生産年齢人口の転入に伴う年少人口の社会増加により少子化の影響が相対的に小さい区と言える。

ただし、平成 20（2008）年～24（2012）年の市区町村別合計特殊出生率¹⁶を見ると、中央区の合計特殊出生率¹⁷は 0.9 と全国の市町村で 9 番目に低い数値となっており、年少人口の自然増加につながる子育ての環境整備が必要と考えられる。

一方で、C グループについては年少人口割合やその変化率ともにマイナス方向に著しい数値となっており、少子化の進展が著しい。高齢化の進行が顕著な区とほぼ一致しており、出生による自然増加や生産年齢人口の社会流入が少ない区と言える。

¹⁶ 「平成 20～24 年人口動態保健所・市区町村別統計の概況 人口動態統計特殊報告」（平成 25（2014）年）厚生労働省大臣官房統計情報部

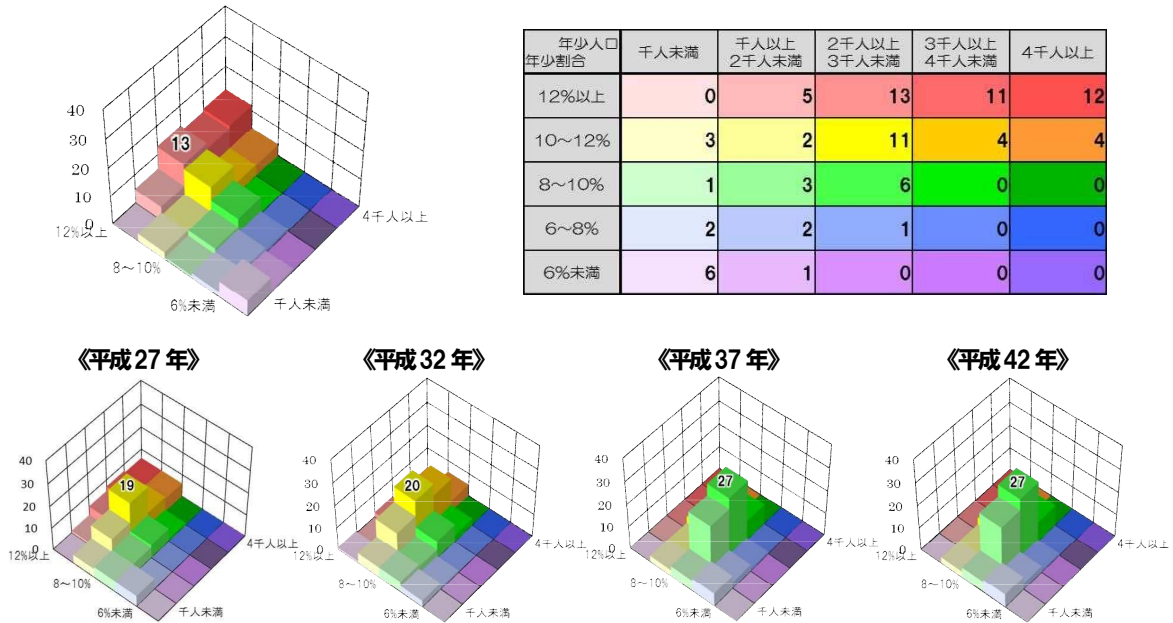
¹⁷ 【合計特殊出生率】 母の年齢別出生数／年齢別女性人口 15 歳から 49 歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1 人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生涯の間に出産するとしたときの子ども数に相当する。

(3) まちづくりセンター区域別年少人口と年少人口割合

図 11 は、年少人口とその割合の状況からみたまちづくりセンター区域の動向を示したものである。色が濃くなるに従って年少人口が多く、且つ、赤色に近くなるに従って年少人口割合が高いことを示す。

【図 11 年少人口と年少人口割合からみたまちづくりセンター区域の動向】

ア 平成 22 (2010) 年 (数字は箇所数)



イ 平成 47 (2035) 年 (数字は箇所数)



☑ポイント

- ・平成 22 年と比較して、平成 47 (2035) 年には年少人口割合 8~10%の地域が全体の 8 割弱を占めることとなり、地域間の差異が小さくなっている。
- ・平成 47 (2035) 年には、年少人口が 1 千人未満の地域が増加している。

ウ 区別・まちづくりセンター区域別の年少人口と年少人口割合の状況

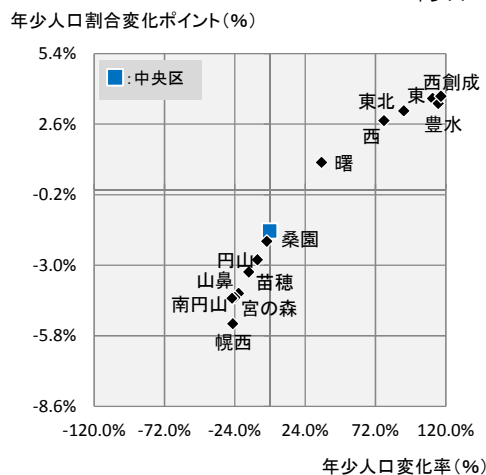
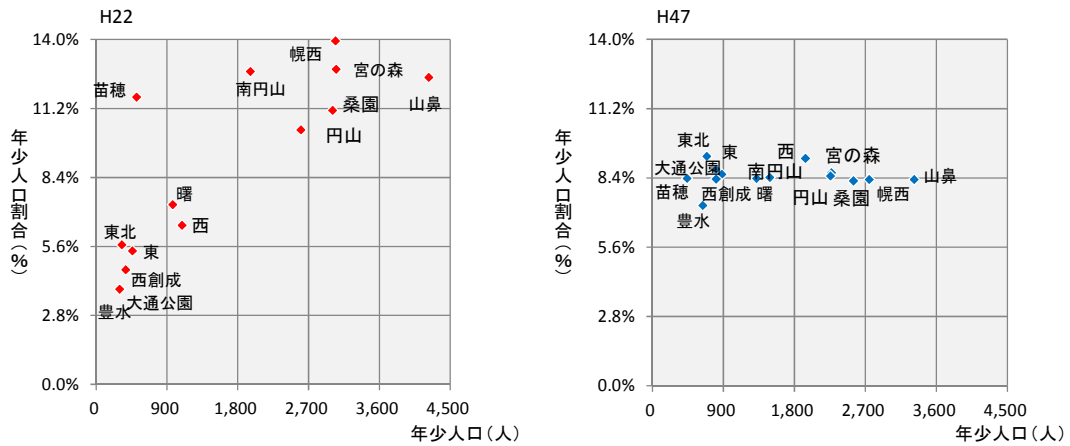
表5は、色が濃くなるにつれ年少人口が多く、赤色に近くなるにつれ年少人口割合が高いことを示しており、下記の表で地域ごとの少子化の推移が把握できる。

【表5、図12 まちづくりセンター区域別年少人口と年少人口割合の推移】

・中央区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	大通公園	308	3.9	620	7.2	890	10.1	1,030	11.4	920	10.0	810	8.7
2	東北	327	5.7	570	9.0	780	11.6	870	12.4	780	10.7	690	9
3	苗穂	514	11.7	540	11.5	550	11.2	510	10.0	480	9.2	440	8.4
4	東	460	5.4	780	8.5	1,030	10.8	1,130	11.4	1,020	10.0	880	8.5
5	豊水	298	3.9	570	6.9	800	9.4	880	10.1	770	8.8	640	7.3
6	西創成	374	4.7	660	7.6	900	9.9	1,050	11.2	940	9.8	810	8.4
7	曙	976	7.3	1,280	8.9	1,530	10.2	1,610	10.5	1,480	9.5	1,320	8.4
8	山鼻	4,232	12.5	4,030	11.1	3,810	10.1	3,600	9.2	3,440	8.7	3,320	8.3
9	幌西	3,044	13.9	2,810	12.0	2,550	10.3	2,430	9.5	2,340	9.0	2,270	8.6
10	西	1,091	6.5	1,630	8.9	2,090	10.8	2,310	11.5	2,130	10.3	1,940	9.2
11	南円山	1,961	12.7	1,840	11.3	1,750	10.4	1,630	9.4	1,550	8.8	1,490	8.4
12	円山	3,007	11.1	3,270	11.2	3,300	10.8	3,280	10.3	2,990	9.2	2,750	8.3
13	桑園	2,604	10.3	3,000	11.0	3,210	11.2	2,990	10.1	2,770	9.1	2,550	8.3
14	宮の森	3,054	12.8	2,750	11.0	2,500	9.7	2,370	9.0	2,300	8.7	2,260	8.5

図12の下記のグラフは、まちづくりセンター別の年少人口割合（縦軸）と年少人口（横軸）の関係を表したものである。

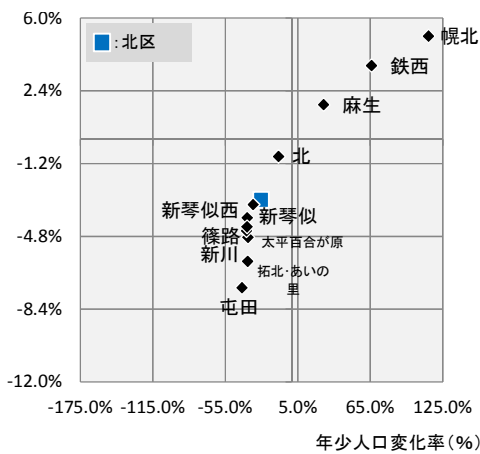
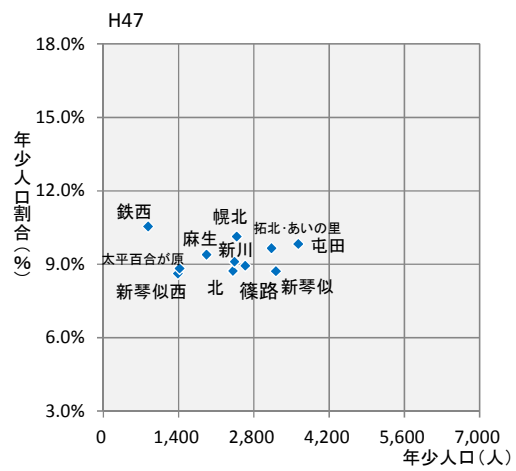
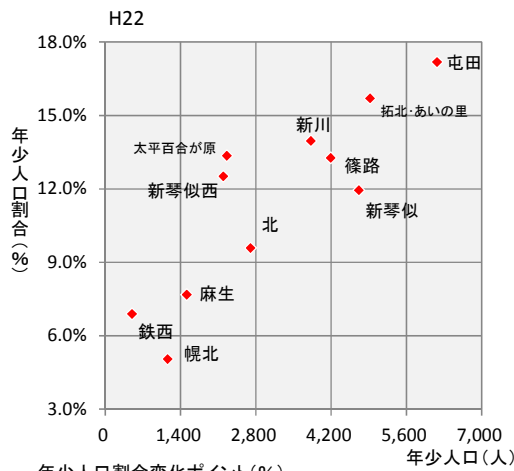


左記のグラフでは、年少人口割合の変化ポイントと年少人口の変化率を表した（区平均を中心に表示）。

中央区の年少人口割合は、将来8%前後に集中するが、その動きに着目すると、年少人口が増加する地区と減少する地区に2分されることが特徴である。

・北区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	鉄西	500	6.9	750	10.2	920	12.3	980	12.8	900	11.5	830	10.5
2	幌北	1,163	5.0	1,890	8.2	2,510	10.7	2,970	12.5	2,730	11.3	2,480	10.1
3	北	2,702	9.6	2,960	10.3	3,100	10.7	3,030	10.6	2,700	9.5	2,410	8.7
4	新川	3,826	14.0	3,460	12.3	3,080	10.9	2,840	10.1	2,600	9.5	2,440	9.1
5	新琴似	4,720	11.9	4,580	11.4	4,300	10.8	3,820	9.7	3,480	9.1	3,210	8.7
6	新琴似西	2,197	12.5	1,980	11.1	1,750	9.9	1,600	9.2	1,490	8.9	1,390	8.6
7	屯田	6,172	17.2	5,670	15.3	4,910	13.0	4,070	10.7	3,820	10.2	3,630	9.8
8	麻生	1,519	7.7	1,980	9.8	2,360	11.5	2,480	12.0	2,180	10.5	1,920	9.4
9	太平百合が原	2,266	13.4	2,190	12.6	1,980	11.4	1,690	9.9	1,540	9.2	1,420	8.8
10	拓北・あいの里	4,927	15.7	4,440	13.7	3,880	11.8	3,460	10.5	3,260	9.9	3,130	9.7
11	篠路	4,193	13.3	3,870	12.1	3,450	10.8	3,040	9.7	2,800	9.2	2,640	8.9

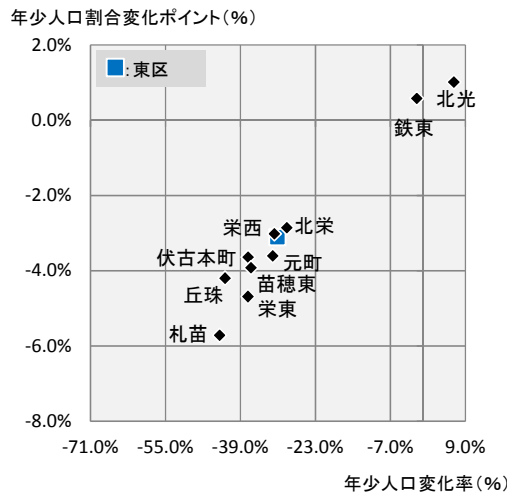
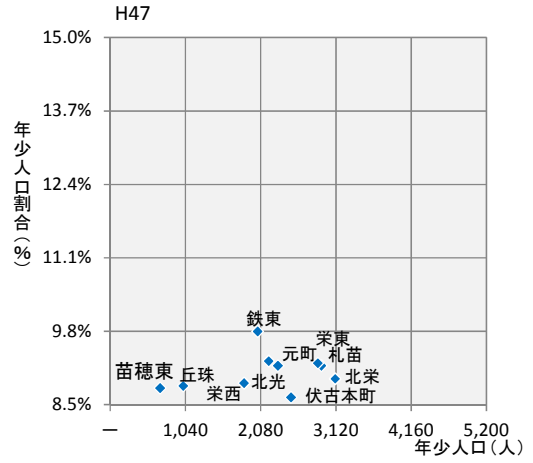
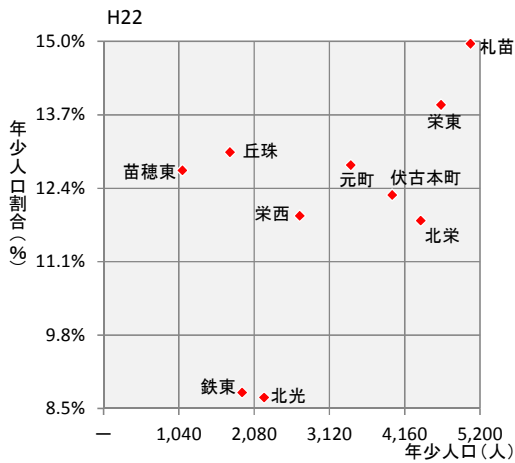


北区の年少人口割合は、平成 47（2035）年に各地区とも 9%前後に集中するが、変化を見ると、鉄西・幌北・麻生の 3 地区とその他の地区とで違いが鮮明である。

これらの 3 地区は、平成 47（2035）年には平成 22（2010）年より年少人口が増加し、年少人口割合も上昇していくことが見込まれているが、その他の地区は、北地区を除き、年少人口が 3 割程度減少すると見込まれており、近年、住宅地開発のあった屯田地区や拓北・あいの里地区での減少が顕著である。

・東区

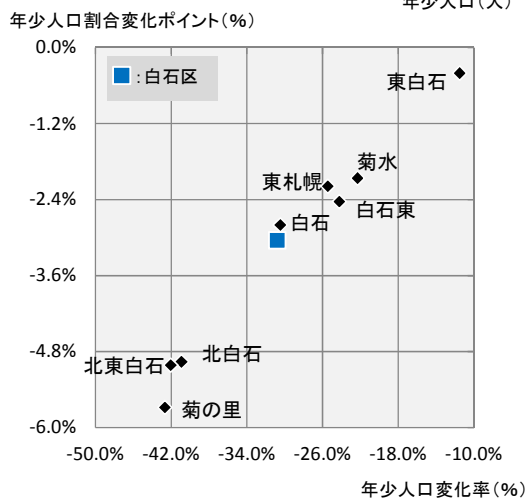
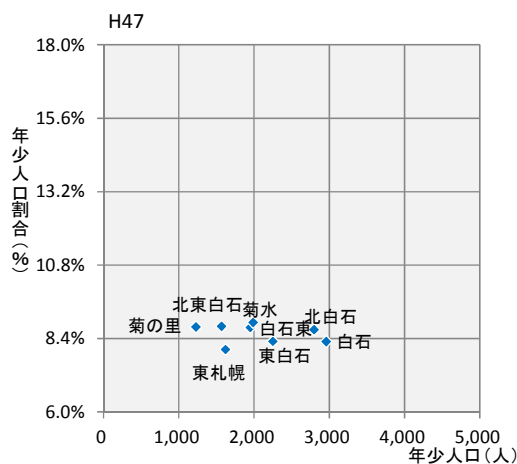
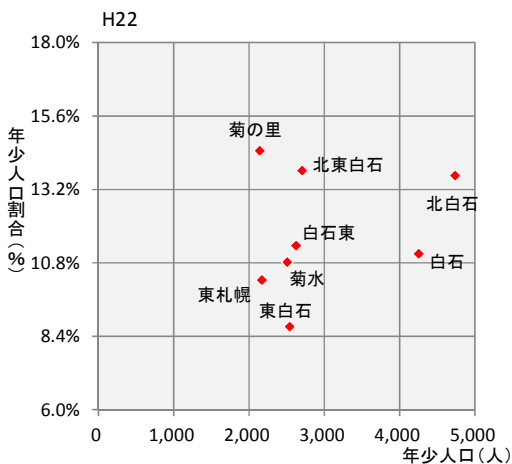
№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	鉄東	1,915	8.8	2,200	10.0	2,400	10.9	2,550	11.7	2,270	10.6	2,040	9.8
2	北光	2,220	8.7	2,450	9.6	2,660	10.5	2,750	11.0	2,460	10.1	2,190	9.3
3	北栄	4,384	11.8	4,310	11.6	4,230	11.4	3,890	10.7	3,470	9.7	3,110	9.0
4	栄西	2,711	11.9	2,580	11.3	2,440	10.8	2,240	10.1	2,020	9.4	1,850	8.9
5	栄東	4,664	13.9	4,430	13.1	4,010	11.9	3,520	10.5	3,180	9.7	2,920	9.2
6	元町	3,416	12.8	3,370	12.6	3,190	11.9	2,890	10.9	2,580	9.9	2,320	9.2
7	伏古本町	3,990	12.3	3,680	11.4	3,330	10.4	2,940	9.4	2,690	8.9	2,500	8.6
8	丘珠	1,749	13.0	1,470	11.1	1,260	9.7	1,160	9.3	1,080	9.0	1,010	8.8
9	札苗	5,071	15.0	4,320	12.7	3,630	10.8	3,220	9.7	3,010	9.3	2,870	9.2
10	苗穂東	1,090	12.7	1,000	11.6	910	10.7	840	10.0	750	9.2	690	8.8



東区の年少人口割合は、平成 47（2035）年に 9%前後に集中するが、鉄東地区と北光地区は平成 37（2025）年頃まで年少人口割合が上昇し、その他の地区は平成 22（2010）年頃から低下が始まる見込みである。その結果、平成 22（2010）年に年少人口割合の低い鉄東地区が、平成 47（2035）年には区内で最も高い割合を示すこととなる。逆に、札苗地区は現在の高い年少人口割合が急落し、平成 47（2035）年には年少人口が平成 22（2010）年と比べて約 4 割減少する見込みである。

・白石区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	白石	4,256	11.1	4,240	11.0	4,090	10.7	3,700	9.8	3,250	8.8	2,960	8.3
2	東白石	2,542	8.7	2,880	9.8	3,040	10.5	2,960	10.4	2,550	9.1	2,250	8.3
3	東札幌	2,173	10.2	2,360	11.0	2,320	10.9	2,170	10.3	1,840	8.9	1,620	8.0
4	菊水	2,509	10.8	2,720	11.6	2,740	11.7	2,520	10.9	2,200	9.7	1,950	8.8
5	北白石	4,739	13.7	4,180	12.0	3,710	10.7	3,240	9.5	2,960	8.9	2,800	8.7
6	菊の里	2,145	14.5	1,930	13.0	1,700	11.5	1,430	9.7	1,320	9.2	1,230	8.8
7	北東白石	2,708	13.8	2,360	12.0	1,980	10.2	1,770	9.2	1,640	8.8	1,570	8.8
8	白石東	2,626	11.4	2,650	11.3	2,590	11.0	2,420	10.4	2,160	9.5	1,990	8.9

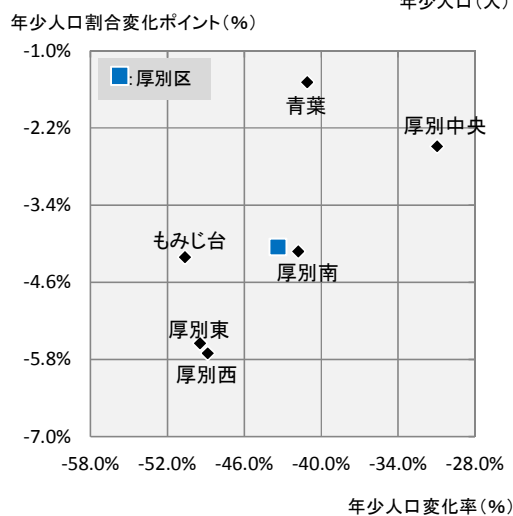
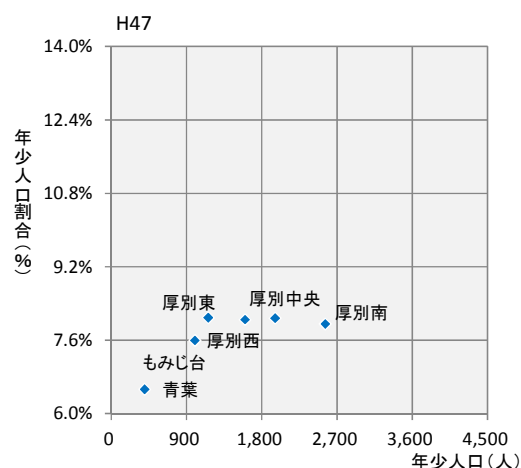
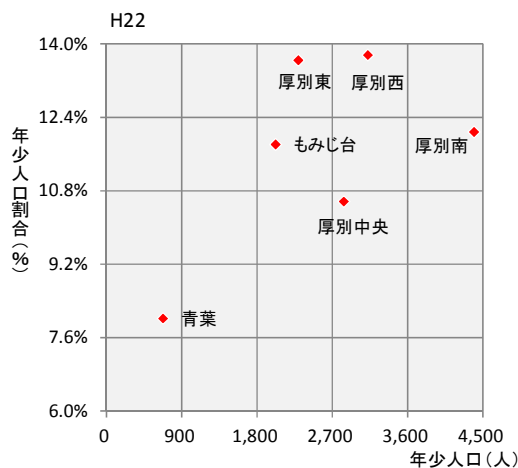


白石区は、平成 22 (2010) 年と平成 47 (2035) 年と比較するとすべての地区で年少人口 (年少人口割合) が減少 (低下) する見込みだが、その減少 (低下) 傾向には地区によって違いがあり、その傾向は二極化している。

区平均と比較すると、北東白石、北白石、菊の里の 3 地区は区平均以上に年少人口 (年少人口割合) の減少率 (低下幅) が大きく、その一方で、それ以外の地区は区平均よりも減少率及び低下幅ともに小さい。これは前者の 3 地区が、一貫して年少人口が減少しているのに対し、その他の地区は平成 27 (2015) から平成 32 (2020) 年頃まで年少人口が増加した後、減少に転じることが要因として挙げられる。

・厚別区

No	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	厚別中央	2,839	10.6	2,800	10.4	2,800	10.6	2,560	9.8	2,250	8.9	1,960	8.1
2	厚別南	4,398	12.1	3,880	10.7	3,460	9.7	3,200	9.2	2,840	8.4	2,560	8.0
3	厚別西	3,128	13.8	2,590	11.5	2,180	9.8	1,950	9.0	1,760	8.5	1,600	8.1
4	もみじ台	2,025	11.8	1,710	10.2	1,440	8.9	1,250	8.2	1,120	7.9	1,000	7.6
5	青葉	679	8.0	610	7.4	550	7.0	530	7.2	460	6.8	400	6.5
6	厚別東	2,295	13.6	2,030	12.2	1,690	10.4	1,430	9.1	1,280	8.5	1,160	8.1



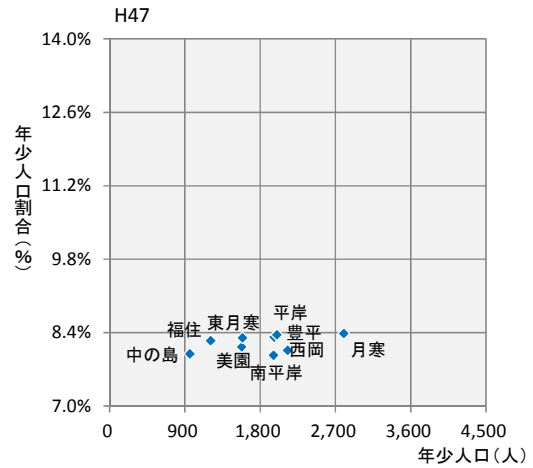
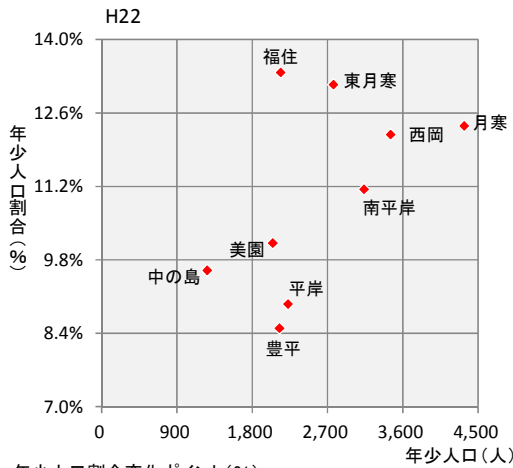
厚別区は全ての地区で年少人口が減少傾向にあり、特にもみじ台地区などで平成22(2010)年に比べて平成47(2035)年には年少人口が半減すると見込まれている。

ほかにも青葉地区は、平成22(2010)年時点でも年少人口割合が低い地区であり、年少人口は将来に渡ってさらに約4割減少すると見込まれているが、年少人口割合の低下幅は小さい。これは、年少人口と生産年齢人口の減少のスピードが同程度であることが要因と推測される。

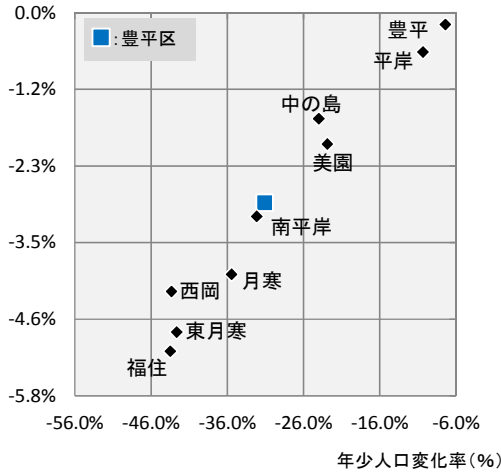
このように、生産年齢人口の社会流入や自然増加が少なく、人口の減少とともに少子化が進むのが特徴となっている。

・豊平区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	豊平	2,127	8.5	2,460	9.8	2,620	10.5	2,550	10.3	2,230	9.2	1,970	8.3
2	美園	2,048	10.1	2,170	10.6	2,210	10.8	2,070	10.3	1,810	9.1	1,580	8.1
3	月寒	4,337	12.4	4,080	11.5	3,820	10.8	3,390	9.7	3,050	8.9	2,800	8.4
4	平岸	2,230	9.0	2,540	10.1	2,690	10.7	2,630	10.6	2,300	9.4	2,000	8.4
5	中の島	1,263	9.6	1,330	10.1	1,320	10.1	1,220	9.5	1,080	8.7	960	8.0
6	西岡	3,457	12.2	3,000	10.6	2,530	9.1	2,250	8.4	2,080	8.1	1,960	8.0
7	福住	2,141	13.4	1,860	11.6	1,600	10.0	1,410	9.0	1,290	8.5	1,210	8.2
8	東月寒	2,772	13.1	2,380	11.2	2,070	9.9	1,840	9.0	1,680	8.4	1,590	8.3
9	南平岸	3,138	11.1	3,070	10.8	2,910	10.3	2,660	9.5	2,360	8.7	2,130	8.1



年少人口割合変化ポイント(%)

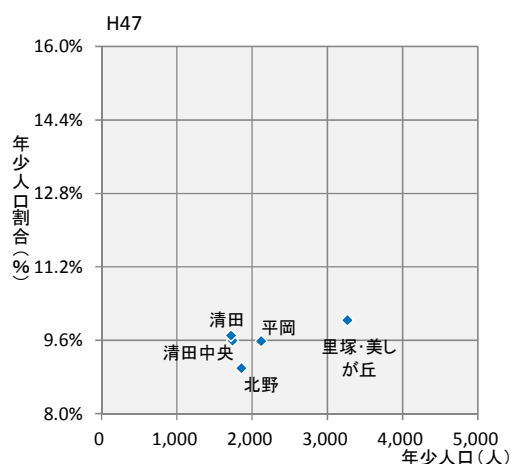
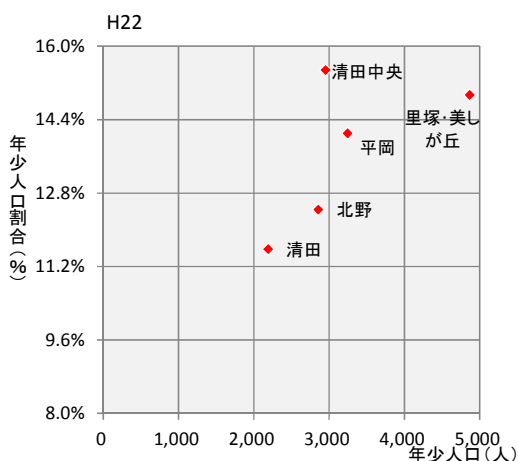


豊平区では、平成 47 (2035) 年にすべての地区で年少人口が減少する見込みであるが、豊平、平岸、中の島、美園の 4 地区では、平成 27 (2015) から平成 32 (2020) 年頃まで年少人口が増加した後、減少に転じることから、平成 22 (2010) 年と平成 47 (2035) 年を比較したときに年少人口割合の減少幅などが相対的に小さく、特に豊平地区は年少人口割合の変化が 0 に近い。

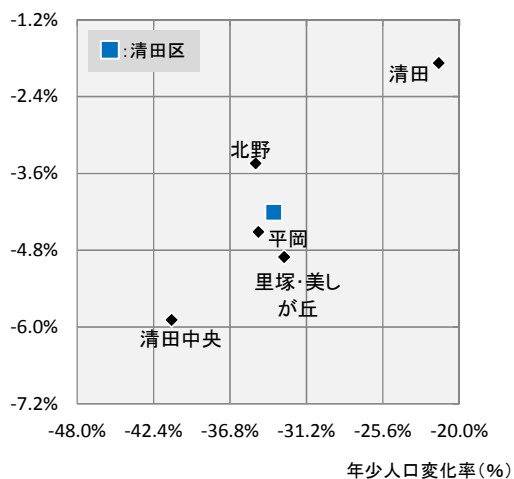
こうした少子化の傾向の違いから、平成 22 (2010) 年時点で年少人口割合が低い豊平地区や平岸地区などが平成 47 (2035) 年には年少人口割合の高い地区となる。

・清田区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	北野	2,858	12.4	2,840	12.3	2,650	11.6	2,300	10.3	2,060	9.5	1,860	9.0
2	清田	2,191	11.6	2,170	11.4	2,190	11.6	2,030	10.8	1,860	10.2	1,720	9.7
3	清田中央	2,953	15.5	2,930	15.0	2,500	12.8	2,100	10.9	1,920	10.3	1,740	9.6
4	平岡	3,248	14.1	3,130	13.3	2,850	12.1	2,540	10.9	2,320	10.2	2,120	9.6
5	里塚・美しが丘	4,869	14.9	4,320	13.0	3,950	11.8	3,780	11.3	3,460	10.4	3,270	10.0



年少人口割合変化ポイント(%)

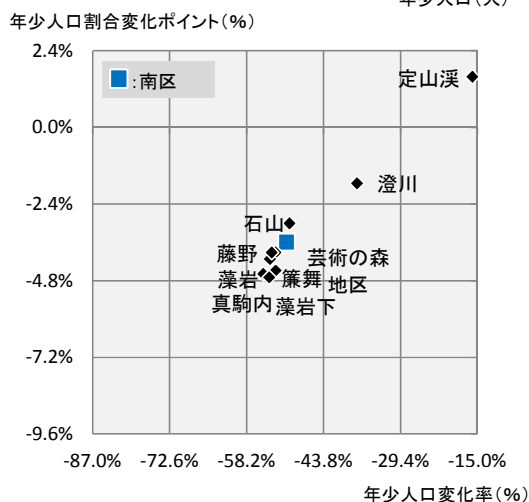
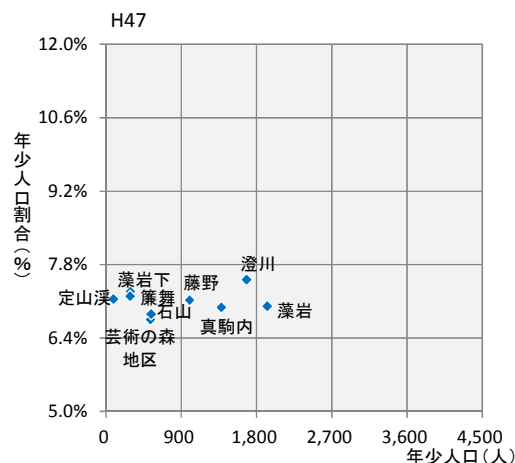
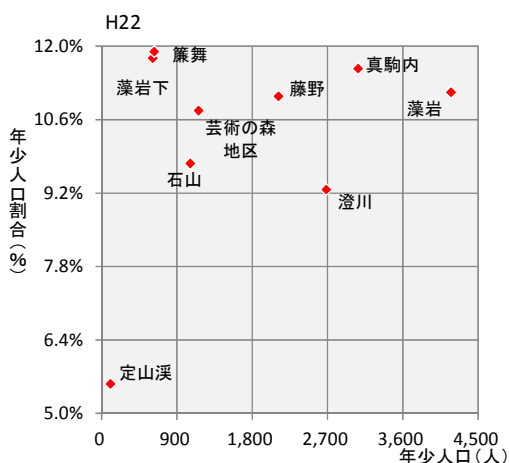


年少人口割合の低下幅を見ると、清田区は平成 22 (2010) 年から平成 47 (2035) 年にかけて、手稲区に次いで市内 2 番目に低下幅の大きい区であり、その中でも、平成 22 (2010) 年に年少人口割合の高い地区 (清田中央、里塚・美しが丘、平岡) で年少人口割合の大幅な低下が見込まれている。

年少人口の減少率でも、平成 22 (2010) 年から平成 47 (2035) 年にかけて、清田地区を除く 4 地区で市平均 (▲30.4%) を超える減少率が見込まれており、清田中央地区では 4 割を超える減少となる。

・南区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	真駒内	3,067	11.6	2,560	10.1	2,190	9.1	1,790	7.8	1,570	7.4	1,380	7.0
2	石山	1,062	9.8	920	8.8	800	8.1	720	7.7	620	7.2	530	6.8
3	簾舞	613	11.8	480	9.5	410	8.5	380	8.3	330	7.7	290	7.3
4	藤野	2,116	11.0	1,690	9.2	1,400	8.0	1,280	7.8	1,130	7.4	1,000	7.1
5	藻岩	4,181	11.1	3,470	9.6	2,920	8.5	2,530	7.9	2,210	7.4	1,930	7.0
6	藻岩下	629	11.9	560	11.0	480	9.8	370	8.0	330	7.6	290	7.2
7	澄川	2,687	9.3	2,610	9.3	2,500	9.3	2,270	8.9	1,960	8.2	1,680	7.5
8	芸術の森地区	1,160	10.8	940	9.1	780	7.9	710	7.7	620	7.2	540	6.9
9	定山溪	107	5.6	120	6.7	120	7.2	110	7.2	100	7.1	90	7.1

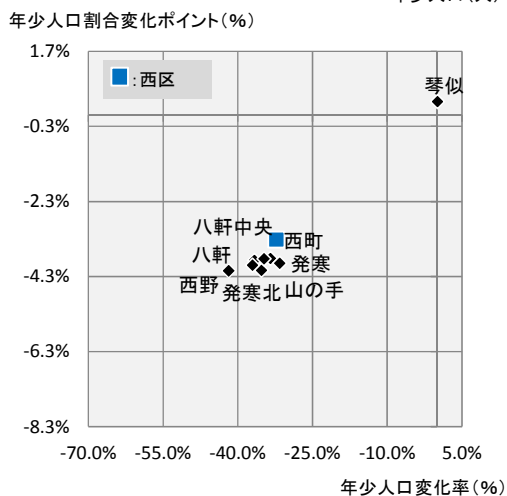
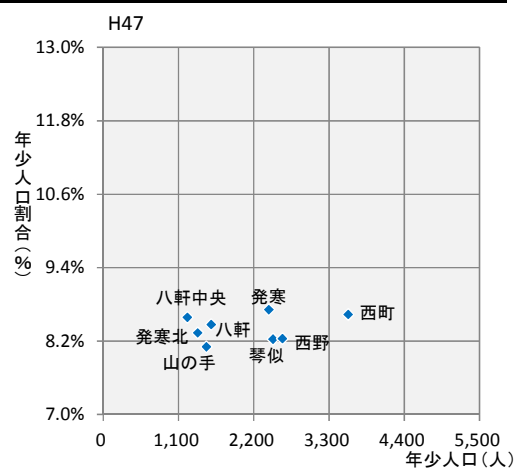
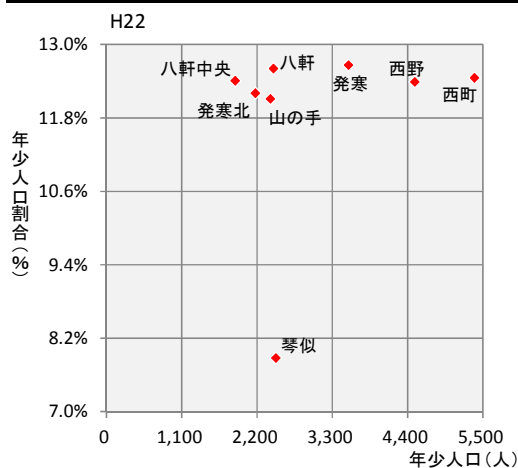


南区は、平成 22 (2010) 年から平成 47 (2035) 年にかけて年少人口の減少率が市内で最も高く、区平均でも年少人口が 5 割減少すると見込まれており、最も高い真駒内地区では年少人口が 55%減少する見込みとなっている。

その中でも地下鉄沿線で利便性を求める生産年齢人口の多い澄川地区は、他地区と同様、年少人口は減少するものの、生産年齢人口の移動に伴って 15 歳未満の子どもも一緒に転入することなどから、年少人口割合の変化が相対的に小さく、平成 47 (2035) 年には区内で最も年少人口割合の高い地区となる。

・西区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	八軒	2,441	12.6	2,310	11.7	2,160	11.0	1,920	9.8	1,720	9.0	1,580	8.5
2	琴似二十四軒	2,478	7.9	2,920	9.1	3,210	10.0	3,320	10.4	2,880	9.3	2,480	8.2
3	西町	5,380	12.5	5,320	12.1	5,020	11.4	4,420	10.2	3,960	9.3	3,580	8.6
4	発寒北	2,178	12.2	2,050	11.4	1,860	10.4	1,660	9.4	1,510	8.8	1,380	8.3
5	西野	4,507	12.4	3,950	10.9	3,390	9.5	3,070	8.9	2,800	8.4	2,620	8.2
6	山の手	2,398	12.1	2,230	11.1	2,020	10.1	1,850	9.4	1,640	8.5	1,510	8.1
7	発寒	3,538	12.7	3,550	12.4	3,440	11.9	3,070	10.7	2,720	9.6	2,420	8.7
8	八軒中央	1,884	12.4	1,730	11.3	1,600	10.5	1,470	9.7	1,320	8.9	1,230	8.6

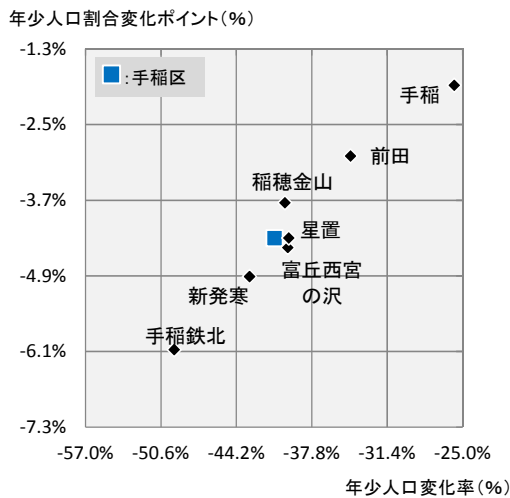
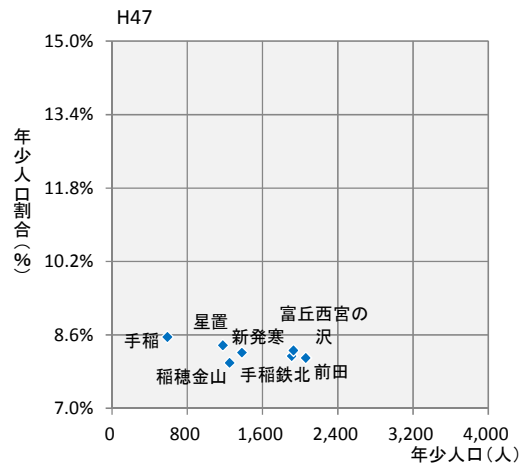
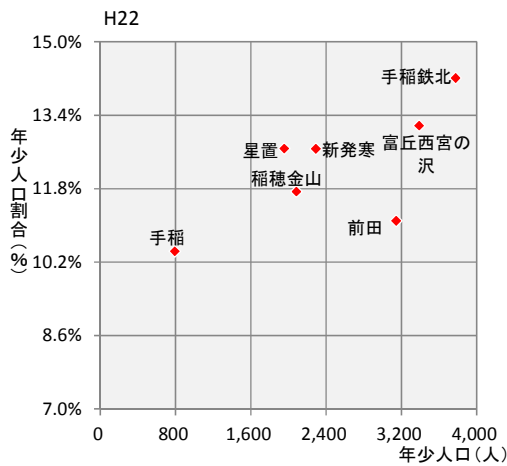


西区では、平成 22 (2010) 年の状況を見ると、琴似二十四軒地区の年少人口割合が低く、その他の地区と大きく異なる様相となっている。平成 47 (2035) 年に目を向けると琴似二十四軒地区の年少人口割合の変化は小さい一方で、その他の地区では全市平均より高い水準にあった年少人口割合が大きく低下し、結果としてすべての地区が年少人口割合 8% 台に集中する。

琴似二十四軒地区は、平成 37 (2025) 年まで年少人口が増加する見込みだが、その他の地区は平成 22 (2010) から平成 32 (2020) 年頃までには年少人口の減少が始まっており、平成 47 (2035) 年までには 3 割以上、年少人口が減少する。

・手稲区

№	まちづくりセンター名	H22		H27		H32		H37		H42		H47	
		年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合	年少人口	割合
1	手稲	794	10.4	830	10.8	840	11.1	780	10.5	680	9.4	590	8.6
2	手稲鉄北	3,780	14.2	3,690	13.8	3,190	12.1	2,430	9.5	2,140	8.7	1,910	8.1
3	前田	3,145	11.1	2,910	10.3	2,730	9.7	2,550	9.3	2,270	8.5	2,060	8.1
4	新発寒	2,293	12.7	2,140	11.7	1,920	10.6	1,710	9.5	1,520	8.7	1,380	8.2
5	富丘西宮の沢	3,391	13.2	3,230	12.5	2,950	11.5	2,480	9.9	2,160	8.9	1,930	8.3
6	稲穂金山	2,086	11.7	1,930	10.9	1,780	10.2	1,560	9.2	1,370	8.4	1,250	8.0
7	星置	1,958	12.7	1,700	11.0	1,480	9.7	1,440	9.6	1,280	8.8	1,180	8.4



手稲区は、平成 22 (2010) 年から平成 47 (2035) 年にかけて、全区で最も年少人口割合の減少幅が大きい区であり、年少人口も区平均で 4 割を超える減少が見込まれており、少子化の傾向が強い。

地区別では、手稲以外の地区で、年少人口が平成 22 (2010) 年以降、一貫して減少しており、その中でも手稲鉄北地区は、平成 47 (2035) 年に年少人口が約 5 割減少する見込みである。

☑ポイント

- ・年少人口は平成 22 (2010) 年に比べ、中央区などの一部地域を除き、平成 47 (2035) 年には減少している地域が大半を占める。
- ・年少人口が平成 22 (2010) 年から既に減少をはじめている地域では、平成 47 (2035) 年に年少人口割合が 8%を下回っている。その他の地域では平成 27 (2015) 年から平成 32 (2020) 年頃をピークに年少人口が減少をはじめ、平成 47 (2035) 年に年少人口割合 8~10%で推移している地域が多い。
- ・年少人口は、生産年齢人口の移動に伴う社会増減と出生による自然増減によるが、さらに自然増減は、地域における 15~49 歳の人口と合計特殊出生率に依存することになる。年少人口を増やすには、子どもを産み・育てやすい環境を整備するほかに、15~49 歳の世代が居住する魅力を高めることが重要である。